

れに似て居る。」

と芭蕉は思つた。

「これは此の伊賀の特産で、他の國には無い品です。」

と人夫は言つた。

玄蕃町に舊主藤堂家の別荘があつた。芭蕉が昔伊賀を立去つた頃は、まだ僅かに三歳の幻兒であつた先代の遺子が、今では壯年の立派な當主となつて居た。ずつと以前、亡くなつた父に仕へて其の知遇を受けた宗房が、今では天下の芭蕉として、文化の東漸を促しつゝある程の、布衣の傑人になつて居る、と蔭ながら知つて居た當主は、たま／＼芭蕉か、伊賀に歸つて滞在在中であると聞いて、櫻樹の豊富な其の別荘に、花のそろ／＼咲かけた頃、家來を遣つて芭蕉を招待した。彼は是までも故郷に歸る度に、主家の安否を心に懸けぬことは無かつた。そして人傳てに、其の無事なことを聞き知つて、安堵の思ひをしたのであつた。併し漫りに訪問すること

は憚つて、態と避けて居たのであつた。

ところが、今、先方から懇ろな使を受けたのだ。彼はそれを有難いことに思つて謹んで出向いた。當主は素直に快く來て呉れた芭蕉に對して、まるで師父にでも接するやうに叮嚀であつた。彼は忝けない心持で、問はれるまゝに、種々の昔語りなどを打ちとけてした。

此の別荘は、芭蕉には昔馴染であつた。花の晨に、雪の夕に、先主の供をしてよく來たものであつた。室内の様子、庭のたゞずまひ、すべて昔と變つて居ない。石燈籠の立ち具合、飛石の布置にまで、おぼろげながら見覚えがある。

暖い日の光が地面に降り注いで、早咲きの櫻は、三分かた咲きかけて居た。其の櫻も今では三十年の永い時を閲して、ずつと生長こそはして居るが、樹相には矢張り昔の俤が残つて居た。先主の影像、自分の小姓姿、其他種々の思ひ出が、夢の繪巻を繰り返すやうに、それからそれへと浮んで來て、彼の胸は、萬感交々といふ文

字其儘になつて来た

さま／＼のこと思ひ出す櫻かな

四十二

三ヶ月以上の日数を故郷で消した芭蕉は、更に旅を行く筈であつたことを思ひ出した。去年の冬、江戸を立つて此方へ来る途中で、尾張から伊良古岬に引返した折に、杜國に約束したこともあるので、打合せの書面を出して、彼を連れることにした。同じやうな笠を持つて、芭蕉と杜國とが旅立つた時は、まだ曉であつた。空は薄暗く、地上には霧が立置めて、何處の家もまだ戸が締つて居た。前の日の春雨に、

道はしつとりと柔らいで、穿きたての草鞋に踏み心地がよい。

凡そ一里ばかり歩いた頃、東雲の空が薔薇色に明るみを含んで、間も無く曙の光が、きら／＼と野山に射しかけた。霧は拂はれて、眼界は廣く展げて来た。黒い羽に金色を浴びた鴉などが、一二羽飛んで行く。稍熱を帯びて来た朝日に照らされて、路傍に濡れて居た石地藏の頭からは陽炎が立つ。

日を重ねて、山城の一角から大和路の方へ入つて行つた。此邊の景色は殊に春らしくなつて、樹木といふ樹木は、悉く生々と脈を膊つて居た。

丹波市に一泊した夜であつた。側に並んで寝て居た杜國が、疲勞のせいにか、今まで聞いたことの無い程の大きな鼾をかいで、ぐう／＼と正體もなく眠つてしまつた。芭蕉は困つて、起き出して、蒲團の位置を、彼と反對の方へ直して見たが、夜は静かで部屋は狭いために、そんなことぐらゐで、鼾聲は遠くへ行きはしない。芭蕉は寝そびれてしまつた。蒲團に起き直つて、行燈を引きよせて、旅の日記をつけたり

した。駢は止まうともしない。鼻腔から出て部屋中に擴がる、杜國の駢の音波の形
 狀が彼に可笑しく想像されたので、筆を執つて漫畫にして見た。妙な圖柄が出來上
 った。ふら／＼と小刻みに刻んだ二條の曲線が、稍末廣がりになつて行つて、突如
 として膨脹する。膨脹するから曲線の小刻みは除れて張りつめる。果ては再び狭ば
 まるが、駢は一段落になりかけて居るので、曲線を又小刻みに刻む程のゆとり無く
 薄れかけた餘韻を纔かに收拾して、尻すぼまりに局を結んで居る。そして其の圖の
 前中後に、抑揚高低した音律の輻員を數字で書き添へて、駢の全面積を推定し得る
 やうにした。一見したところ、長芋の如く、天の逆鋒の如く、或は獨銛の斷片の如く
 逸として得體が知れない。彼は苦笑した。明方近くなつて少し眠つた。

翌朝起きて、昨夜の漫畫を杜國に見せた。

「これを見なさい。」

「何てございますか。」

「見た通りのものだ。」

「土から掘り出した、古代の劍でもあるかのやうに見えます。」

「さうだ。」

杜國は眞面目になつて、圖解を頻りに見て居るが、芭蕉が笑つて居るので、臍に
 落ちないらしく、もぢ／＼して居る。

「これは駢だ。」

「駢には形がありますまい。」

「あんたの駢だ。昨夜あんたは、斯ういふ駢をかい、私を一晚なやませたのだ。」

「恐れ入ります。」

杜國は笑ひながら、濟まなさうに頭を掻いた。

漂泊の詩僧西行が、尼姿になつて居た昔の我が妻と、櫻散る春の夕まぐれに、たまくし邂逅した處と傳へられた長谷寺に詣てた。それから多武峯たふのむねに登つて、雲雀よりも上空に憩ふやうな、高らかな心持になり、越えて吉野口に出た。

先づ心を惹かれたものは、吉野川の水色だ。ずつと以前に、秋の季節に來た時と同じく、試みに手に掬つて見ずには居られない程に、すつきりと澄んで流れて居た。岸の或る場所には、山吹が咲いてゐて、黄色い葩を水に散したりする。筏の流れて來る川上を遠く見渡すと、左岸の上市の村邑の彼方に、妹山背山が川を挟んで、それから先は、着物を重ねた襟元のやうに、山から山に續いて、又股形またまたがたに空間を切つた遠方には、矢張り曾遊に眺めた時と同じく、伊勢の高見山が、相變らず稜角の山

勢を紫色に染めて居た。

吉野川の水源は、大和、紀伊、伊勢の分水嶺をなして居る、大臺原山おほたいがはらやまの秘境であるといふことだ。高さが七千尺もあると謂ふ其の峻嶺に就て、休んだ茶屋の亭主は面白い傳説を聞かして呉れた。

千古未だかつて、斧鉞を入れたことの無い、山また山の其の物凄い秘境に、始めて脚を踏み込んだのは、昔の役えんの行者ぎやうじやなさうだ。行者が開闢以來未だ嘗て人の恐れて窺ひ寄つたことの無い、其の深山幽谷に分け入つて、日が暮れ日が出て、恰度三日目になつた時、大きな暗い瀧の落込んで居る、鬱蒼とした森林の中の、奈落の底のやうな谿谷へ圖らずも出た。行者は見て、此處こそ山の主と稱される悪蛇の棲んで居るところに相違ないと思つて、其の傍の岩の上に、木の枝を組み、草を蔽うて小屋を造つた。さうして其の内に身を忍ばして、靜かに窺つて居た。

夜になり、やがて更けて眞夜中になつた。天心には月が小さく懸つて居る。不思

議なことに、風も無いのに、四邊の森がざわ／＼と騒ぎ出した。すると間も無く、切立つた大きな岩の裂け目から、長さ十二尋もある大蛇が、のろ／＼と這ひ出して来て、行者の隠れて居た小屋を、七巻きほどに、ぎり／＼と巻き締めた。行者は阿吽の呼吸を見計つて、印を結んでいきなり呪文じゆもんを唱へた。すると流石の大蛇の、樽のやうな太い胴體が、ぷつりと七つに斷ち切れて、同時に夜陰の天地に、恐ろしい音響を立て、どしんど谷底深く落ち込んでしまつた。あとは再び死のやうな凄寂に歸つた——といふのだ。

以前に吉野山へ登つた時は、秋も末の頃であつた。赤く染つた櫻の葉が。ヒラヒラと風に飛んで、谷を隔てた、杉の密生して居る、彼方の峯々の上には、特に秋に見る、白く透きとほつた雲が流れて居た。水の音も寒かつた。

今度は春の最中だ。山は同じでも、面目が自づと一變して居た。下の千本は既に大方散つて、残つた花が風に脆さを見せて居た。散つた花片は、眞晝の日光に蒸さ

れ縮んで、甘やかな香を放つて、小さな土蜂などを呼んで居た。

背中に軽い汗ばみを覚えながら、だん／＼登つて行つた。吉野全山の大玄關のやうな光景を呈して居る、雄大莊麗な丹塗の藏王堂を抜けて、吉野院から勝手社の前を中の千本の方へ行つた。花は矢張り少しく盛りを過ぎて居た。けれども隔て、見ると、谷々に亘つた傾斜面は、萬朶の櫻によつて、紅色の霞を厚くして居た。

西北方は、今登つて來た方向になる。山中ながら眼界は遠く展けて、杉の林立によつて、鋸狀に空を劃つた、つい目の先の丘陵を隔て、龍騰色りんとくした壯大な高山が二つ見える。右方に陣取つて、海上に浮いた巨鯨のやうな山勢を示して居るのが葛城で、左方に兜を伏せたやうに、がつしりと根を構へて居るのが、金剛であることを知つた。

あの二つの山が、恰度今と反對の位置に並立して居るのを、何處からか見たことがある——と、芭蕉はフト臆ろげながら記憶を思ひ出した。よく考へて見ると、

それはずつと以前に、彼が舊主の遺髪を携へて、高野に登つた時に、中腹の山峽から振返つて遠く眺めた時の、初対面の名山に寄せた驚異と憧憬との心であつた。今立つて居る、此の吉野山の一角からは、七里もあらうか、十里もあらうか、兎に角、目路遙々と、思を遠くさせる悠久な眺だ——と彼は思つた。

上千本から、更に、曾て苔清水を尋ねた時に覺えのある、急峻な坂を登り詰めて、頂上の山蔭に在る、奥の千本にまで行つた。右方の傾斜面は、樹から樹、枝から枝に櫻の花の盛られた紅の國た。左方の傾斜面は、杉の針葉に深々と包まれた緑の國だ。双方から狭まり合つて薬研状を呈した底部を、苔清水の細々とした清流が、草木の中を潜りながら、南に向つて低く落ちて居る。

花によつて明るく浮かされた視覚は、杉や松の緑によつて、暗く落ちつかされた。杉や松の緑によつて、暗く落ちついた視覚は、また花によつて明るく浮かされた。芭蕉と杜國とは、斯うした山中に三日寢起して、花から先づ白々と明けかける曉の

景色も見た。寺院の鐘が峯々谷々に響き渡る、静かな黄昏も見た。一陣の風に美しく深く散る花吹雪も見た。

四十四

吉野川はやがて名を變へて、紀の川となるのであつた。二人は其の流域に即いたり離れたりしながら、下つて西を指した。高野山へ登るのだ。

「高野は矢張り、吉野のやうな山でございませうか。」

「もつと峻しい。麓から奥の院までは、吉野の倍近くの道のりがある。」

「絶えず信者が出入しますだけに、もつと優しい山かと想像して居りました。」

「山は暗く、谷は深い。途中には青い淵もある。」

杜國は、まだ見ぬ山の様子を、芭蕉にきいた。

先に吉野山中から、遠くに望んだ、葛城山の裾をぐるりと迂回した。麓に千早城の舊跡があるといふ金剛山も、山膚の明瞭に判るほど、右方に近づいた。振返つて見ると、吉野の峯々は、既に國境の彼方になつてしまつて、其の彼方の更に遠い處に、大峯から大原山あたりと思はれる峻嶺が、蒼穹から吊された一大搖籃のやうに連嶺の上に頭だけを出して、雲路でも辿らなければ行き到ること思ひも寄らぬものの如く、現世離れして隠見しつゝある。『遠山無限碧層々』といふ禪宗の語録が、芭蕉の胸に浮んだ。——紀の川は益々河幅を廣めて、處々に竹藪などのある丘阜きうぶに添うて、藍青色に流れて居る。

天日を蔽ふ楨や松の巨木に護られて、高野山は矢張り一大靈域を成して居た。奥の院には、昔から燈明の點し續けられて居るといふ燈籠堂が、永世に變らぬ法の影

を象徴するかのやうに仄々と瞬いて、宗師の墳墓の前には、身を地面に投げ出して時移つても、微動もせずに、ひれ伏したなりの信者も居た。

芭蕉は三十年前のことが、あり／＼と思ひ出された。主人の死に因つて受けた心の負傷を包みながら、遺髪を大切に懷中に納めて、高野へ！高野へ！！と、ひたぶるに此の山指して來た當時の、感激に満ちた自分の若々しい姿が、目の前にちらつて來た。

杜國はそれを察したらしい。

「お若い頃、御主公様にお叫れになつて、悲しみの遣り場にお窮りになり、遙々と此の山へお登りになつたお話は、いっぞや伺ひましたが、斯うして參つて見まると心無い者にも、何とない深い感じがいたします。」

「あれは最う古いことになつた。あんたがまだ三つか四つの頃だらう。私もまだ漸く青年になりかけたばかりの、心の定まぬ若者であつた。主人に別れた悲しみやら、

人にも言へぬやうな悩みなどに附纏はれて、逃げるやうな心持で、此の山へ來たのであつた。」

「晝もなほ薄暗い、この森林の様子から、寺々の静かさ。本當に寂光じやくくわうの淨土と申すやうな心持がいたします。」

「一度は此の山を下りて、伊賀へ歸つたが、どうにも安んずることが出来なくて、老境に入りかけた、父母を省る餘裕すら失つて、放浪したのであつた。そのため父の死目に會へなかつた。のみならず、放浪から放浪を續けて、江戸に出て居るうちに、我儘な自分の性分から、あとに残つた一人の母の臨終にすら、どう／＼間に合はなかつたのだ。」

「併し御兩親様は、屹度草葉の蔭に御安心なされて居られます。」

「我儘な自分の心底を、父にも母にも言ひ解く機會も、推量して頂く機會も、永久に失つてしまつたことを思ふと、覺めて惜しい夢の跡でも趁うやうな、果敢ない心

持がする。」

「お心持はお察しが出来ます。」

「私も最うそろ／＼老境に入つて、やがては亡くなつた親の年齢にも達するのだが、幾ら年を取つても、父や母を憶ふ時、人の子としての心持は、いつも幼くなるものだ。」

「尊いお言葉と存じます。」

「雉子の聲がするではないか。——こんなものが浮んで來た。」

父母ちちはの頻りに戀し雉子の聲

西國三十三番の一つの、粉河寺などへ詣で、二人はやがて和歌の浦に出た。吉野川としてのうちから、親しんで来た紀の川は、いよ／＼此處で海に注がうとして河幅を十分に廣め、水を深くして、流れるとも見えぬ大江をなして居た。

東には名草山の翠微を背負ひ、前面は暖流の通ふ由良の海峡を隔て、淡路島の一端と呼應して居る。入江の邊には蘆荻が、若々しい青さに繁つて居る。渚に添うた左方の山際には、紀三井寺の大きな伽藍が、空中に出現した殿堂のやうに、霞に煙つて見える。

空と水とが一線を引いて居る沖の彼方に、白帆の影を一つ見つけて、よく目を凝すと、其の先の方にも、また白帆が夢のやうに、煙波の間から生れて、視界に入つて来る、

伊賀を出てから、山城、大和と巡りめぐつて、多武峯に、吉野に、高野に、紀の川縁に、春を趁うて歩き歩いて、前面を海洋に絶れた、岬に似た此の浦の一角に來

て、漸く前途を斷れた。

行く春に和歌の浦にて追ひつきたり

氣温は日に／＼昂騰して、花は悉く散り盡し、見渡す山々は、青葉のために姿に圓みを帯びて來た。五月の更衣時になつた。併し旅から旅へと、行方も定めずに漂ふ身には、其のやうな年中行事も至極簡單で、着てゐた衣類を、無雜作に一枚脱いで、まるめて背中にやつたまでだ。

轉じてまた大和に入つた。法隆寺に行つて、千年を胡粉こごに埋めた、頭北づつ、右胸臥うきやうの釋迦の涅槃像ねはんざうも見た。筆觸の幽な壁畫も見た。推古朝のすつきりとした佛像、天平時代のおつとりとした佛像に、各自獨特の美術の匂も味はつた。夢殿ゆめどのの周圍を漫ろに回りながら、三昧裡さんまいに在した太子の、佛其者のやうな端正な佛を想像したりして、奈良に行つた。三笠山は草に青んで、曾て秋に見た時よりも、更に柔かに圓く見えた。此地で杜國と別れた。

單身になつた芭蕉は、地に映る我が影を連れて、生駒の山間を彼方に越えて大阪に出た。日頃敬慕して居た山崎宗鑑の遺蹟などを尋ねて、更に須磨に行つた。海上を照す初夏の月影には、まだ何處かに春の朧ろな名残があつてなかく捨て難い夜色ではあるが、青く澄み渡つた仲秋の月光に比べると、何となく留守宅でも訪れた時のやうな、物足らなさを感ぜぬでもない。

夜の明け方は、時鳥でも啼きさうな景色であつた。海の上から先づ白々と瞬きかけた漁村の軒には、芥子の花が露重げに、危く美しく咲いて居た。地面には低く露が這つて居る。濱邊へ鴉が来て、キスコとかいふ魚を銜へ去らうとするのを、漁師か弓を引く眞似をして威したりして居る。

松風村雨の舊跡は、月見山の下方にあつたが、たゞ形ばかりの小祠があるだけで堂守すら居ない。それでも誰が手向けたのか、紅い草花が一二輪指してあつて、可憐な女性の夢の跡を、覺束なく語つて居た。須磨寺へは其處から直ぐであつた。

附近一帶に松の豊富な處だが、殊に松の群れによつて、青く深く装はれた山が目についた。それは鐵拐ヶ峯であつた。彼は漁師の家の十六になるといふ少年を案内に頼んで、登つて見た。

峯續きに、丹波路へ通ずるとかいふ、細い山道がある。懸鐘松かけねまつといふ森の切目から俯瞰すると、一の谷の内裏跡ないりあとといふのが、直ぐ眼の下になつて居る。頑是無い幼帝を抱いたまゝ、海底深く呑まれ去つた二位尼のことや、内侍、局はつね、女孀にょじゆ、曹子といふやうな、世間を餘所に優雅な生活をして居た人々が、白旗を翻した坂東武者に追ひ捲られて、慌てながらも流石に、愛惜する琵琶や和琴わごんを縛しなねにくるんで船中に投げ入れながら、身をもつて遁れた光景や、供御くごはこぼれて海魚の餌になり、金銀で飾られた櫓筒けが、散亂して海砂に埋もれた有様や、味方のあとからく逃げて來て船縁に捉まらうとするのを、中の者は沈むを惧れて、片つ端から切りたのど、捨て斷臂が船に満ちたといふ状態や、例の敦盛の劇的な場面などまでが想像されると同時

に、權勢も知識も、得意も矜恃も、一場の夢覺め果てた後には何も無い——と、坐ろに舊が傷まれた。

蝟壺や果敢なき夢を夏の月

海濱は、試みに坐つて見たいほどに、綺麗な砂原だ。くねつた黒松が其の間に亂れ續いて居る。——明石は最う直ぐ其處だ。

四十六

踵きびすを返した。今市村といふ處へ来て、追分の茶店に休憩したところが、近所の農夫らしい男と、其家の婆さんが、何か頻りに話をして居る。聞くともなしに聞い

てゐるうちに、だん／＼様子が分つた。

何處か其の邊に、親孝行な子供が居る。十三の姉と、十の弟だ。父親の居る時分から、氣の毒なほど貧しかつたが、其の父親が、去年の暮近い寒さの頃、感冒で病床に寝込んだ。蒲團と云つては、煎餅のやうな薄いのが一枚で、碌々薬も服むことが出来ずに居た。それらのせいか、病んで十日も経たぬうちに、惨めな死態をしてしまつた。

其時母親は懷妊して居た。それが此頃出産した。けれども夫に死なれた痰膽やら貧困の攻苦やらで、身體が順調でなかつたと見えて、難産であつたのみか、其後の肥立が悪く、日増に暑くなるといふのに、蠅や蚊のうるさい、犬猫の棲みさうな汚ない部屋に寝たきりで居る。

母親は心身の苦痛に、神経を昇たからせて、いつそ之が無ければよいと、何も知らずに生れて來た赤子を呪ひながら、怒つて見たり泣いて見たりして居る。二人の小さ

な姉弟は、斯うした中に在つても、決して悄氣しよげない。間がな隙がな病母を力づけてゐる。

足もさする。蚊や蠅も逐ふ。粥も煮る。汚ない洗濯もする。そして其の合間々々には、人に頼んで、使ひ歩きをさせて貰つて、僅かばかりの穴明錢を得、夜は夜でまだ固まりもせぬ小さい手で、繩を縛ふ。姉は弟に最う寝ろと言ふ。弟は肯きかない。却つて姉を寝かさうとする——斯ういふ話だ。

高野の山奥で、雉子の聲を聞いて、父母を憶ひ出して、幼ない心持になつた芭蕉は、二人の孝子を尋ねて行つた。慰めてやつた。勵ましてやつた。そして持合せの金を割いて與へた。

再び大阪に出た。淀川を溯つて大津に行つた。此地には乙州が住んで居た。乙州の母にも俳諧に遊ぶ老寡婦であつた。或日其の老寡婦は、滞宿の芭蕉の前に、硯を持つて來た。

「お越し下されましたを幸ひ、どうぞ私に、形見のお筆蹟をお遺し下さいませ。」
芭蕉は快く承知して、筆を執りながら

「六十に近いお方に、形見を請はれるとは、心細いことです。私に先に死ねといふ謎めづてございますか。」

と言つて、から／＼と笑つた。一夜乙州に案内されて、瀬田へ螢見に行つた。去つて美濃の大垣へ來た時に、惟然ひねんがフラリと訪ねて來た。

惟然と申します。死なれて困る妻に死別れてから、最う十年近くになります。妻に死なれた時には、頭がムシヤクシヤしました。親は無くとも子は育つと云ひますから、ムシヤクシヤまぎれに、可哀さうでもありませんが、娘を置去りにして、私は宿無し坊主になつたのでした。ところが悪いことは出來ないもので、此の間其の娘に、絶えて久し振りに偶然邂逅ごうごうしました。少しひやりとしました。なか／＼美しくなつて、嫁に行くほどに成人して居ましたつけ。置去りにした私を恨む様子も見え

ませんでした。暫時立話をしてから、また會はうと言つて、別れようと思ひましたら、左様ならと言つて、私より先にズン／＼行つてしまひました。貴方も漂浪のお方、私も風のやうな人間、いつまた何處でお目にかゝるか知れませんが、お見知り置きを願ひます。」

豫て噂には聞いて居たが、なるほど奇體な人物だと芭蕉は思つた。併し同時に、其の飛び離れた飄々の風骨の裡に、拭つても拭ひ去れぬ、或る悲哀の裏づけられて居るやうに、芭蕉には見えた。

「お身の上は豫て伺つて居りました。又と無い御境涯かと思ひます。家の内に蹲つて、襟に首を埋めてばかり居たのでは、會心の句の生れる筈はありません。」

「元より私などに、佳い句などの、出来る筈のものではありませんが、それでも山行き水行きしながら、浮んだ儘を句に盛つて、それを聲振り立て、誦うたひ續けて居りますと、分相應の有難い世界が出て來ます。」

四十七

惟然に別れてから、芭蕉は岐阜に行つた。

長良川に林のせんだ水樓の主人は、賀島といつて、豫て知合の間柄であつた。或る日芭蕉は招かれて出かけて行つた。通された二階の一室は、樓中で一番眺望の佳い場所であつた。屋後には稻葉山が高く聳え、其の左右には亂山が起伏重疊して、緑の堆積が直ちに勾欄に追つて居る。

河幅が廣く流の緩かな長良川は、處々から落ちる、大小の瀧を呑みながら、天地の暑さを悉く吸収してしまふかのやうに、涼しい水光を空間に投げつゝ、汪洋とし

て流れて居る。河岸に添うた竹藪の緑に、少數の民家が隠れ加減に點在して、漁師らしいのが網を曳いたり、水面に突き出した棧橋の上で、幾本もの釣竿を並べて居る者などがある。

一方を見ると、稻の青々とした水田が遠くまで展けて、一叢ひらの杉の木立の間に、田舎寺あなかとらの屋根らしいのなどが見える。風は絶えず青葉を渡り、水を渡つて吹いて來ては、涼しく樓に満ちて、床の掛軸を騒がせたり、疊の上の團扇を飛ばしたりする。眺望が佳くて涼しい處——強ひて名をつけるならば、『十八樓』とても呼びたいやうな氣がした。

此のあたり目に見ゆるもの皆涼し

「よくお越し下さいました。鶉飼は月の明るいのを厭ひまして、只今のやうに、月の出の早い上弦の夜は、月の隠れるのを待ちますし、下弦の夜は、月の出ませぬうちに漁うりやうに取りかゝるのでございますが、出た月の隠れてからの方が、緩くりいたし

て宜しうございます。」

と、主人が言つた。

落日の後の夕焼色が、月の光と變つて、漁家に燈火が瞬いたが、其の月光が西に薄れるのを待たなければ、鶉飼は見られないのだ。待ち遠しい氣のせぬでもないが淺黄色の空の下に、萬斛の涼味を湛へて流れて居る、この景色を眺めて居るだけでも、夜更しをするほどのことはあると思つた。

漁家ではそれふに、鶉飼舟の準備をして居る様子である。芭蕉の乗せて貰ふ小舟も、用意が出来たといふことだ。初めて遊んだ土地の面白さに、いろ／＼と氣が紛れて居るうちに、夏の夜は宵から直ぐに、初更の氣配になつて、月もずん／＼動いて行つた。

鶉飼舟の篝火が、處々方々で、赤い灯影を川波に散しかけた。主人と芭蕉も樓を出て舟に乗つた。簑の下半部のやうな拵へ方をしたものを、腰のまはりに纏うた漁

師は、江流に従つて舟を下しながら、十二本の綱をつけた十二羽の鵜を、纏れさせず亂さず、手捌き巧みに使ひ分ける。ずぶりと水中に潜つた鵜は、綱の運びに動作を知らせながら、右往左往して、やがてひよくりと浮び出す。喉元は膨れて居るが首の綱に支へられて飲下^{いんげ}することが出来ない。漁師は鵜を手元に引寄せて、喉を逆に扱^とく。鮎の白い鱗が閃いたと思ふうちに、籃の中へ手早くぶちこまれる。

また鵜を放つ。別の鵜が水中から出て来る。鵜は魚を獲つてもく、皆吐き出させられるのに膺^こりる様子も無く、交るく幾度もなく、ずぶりと水中に潜つて行く。そして出て来ては、目を白黒させながら、漁師に喉を扱かれる。水中の鵜、舟中の漁師、たゞ一本の細い麻綱によつて、以心傳心、互に一體になるの妙諦を心得合つて居る。

水面の灯影を映しながら、舟の揺れるに従つて揺れる篝火。水に潜り込む鵜。水から出て来る鵜。漁師の手早い動作。魚鱗の閃き。相當に間隔を置いて、相呼應す

るやうにも見える舟と舟との陣形。すべて目まぐるしいほどの光景だ。

フト氣がつくと、夜は更けて居た。漁師もそろく引上げる心組らしい。河の上には散ばつて居る數多の漁舟の中には、篝火の落ちたのがある。水面は暗くなりかけた。手をあてゝ見ると、衣服は夜氣のために、しつとりとして居る。鵜も勞れたやうにげつそりとして居る。漁師の手足もだらりとして居る。息の絶えた鮎は籃の中に詰められてある。總てが濟んだのだ。喧騒の後の寂莫といったやうなものが其處に來た。漁師が鵜を使ふことの、巧妙であつたゞけそれだけに、或る果敢なさに似たものが漾つて來た。

面白うてやがて悲しき鵜舟かな

殘暑の跡が薄らいで、地上に空間に、ごこともなく秋の氣配の流れかけた頃、芭蕉は名古屋屋に行つた。其地には門下の荷分や、越人が居た。或日越人と連れ立つて町から離れた、野田の山本といふ處へ遊びに行つた。

歩いて行く着物の裾に、異臭のある毛ば立つた草の實が、へたばり付いたり、野次が白く咲き伏したりして居る藪の中の小逕や、僅かに實りかけて、莖や葉の未だ青い、稻田の畦などを行つた。

「蚊張吊草といふのは、どんな補物でございますか。」
と、越人は思ひついたやうに尋ねた。

「蚊張吊草は、其の邊に幾らもあらう。」

芭蕉は其の邊を見まはして居たが、忽ち見つけて、四角張つた一莖の小草を手に抜き取つた。

「これが蚊張吊だ。こちらから斯う裂いて、反對の方から斯う裂いて、またこちら

の一ヶ處を斯う裂いて、更に彼方の一ヶ處を斯う裂くと、恰度蚊張の四隅のやうになるので、それで蚊張吊草といふらしい。」

と言ひながら、草の頭部と基部とだけを助けて、莖の稜角を互違ひに四筋に割つて見せた。

「なか／＼お精しいものでございます。」

越人は感心した。芭蕉は笑ひながら

「一木一草でも、仔細に其の性分を見抜くと、顔もあれば心もあるものだ。」
と言つた。

自己を自然其者の姿と水平にして、風吹けども枝を鳴らさずといふ妙諦に遊ぶ契機を、常に雲水の旅に於て味ひつゝある芭蕉は、肌にすが／＼しい秋の觸感に唆られて、旅情は止め度も無くなつた。

「年來憧れて居た信濃路に、此の秋こそは月を見よう。」

越人が供をすることになつた。それでも荷分は尙氣遣つた。

「尾張美濃の國境の内はまだ宜しうございますが、信濃の山國に入る關門になつて居ります、木曾川縁の中津川から先は、行けば行くほど山が深く、谷が暗く、猿や熊でも閉口するほどの、難路でございます。お邪魔かも知れませんが、屈強な下男が居りますから、お供に従はせませう。」

芭蕉は其の厚意を受けた。同行は越人と下男と都合三人になつた。

幾度となく宿々に旅寝して、多治見の先の虎溪山を越えて、土岐津に出た頃、大分疲勞したので馬に乗つた。山が深くなるにつけて、驛路の秋はおひく／＼さやかになつて來た。名古屋を出る時の荷分の言つた、木曾路の關門の中津川に來た。其處は、東すれば山又山に登り、西すればやがて平原に出るといふやうな、國の境をなすと同時に、旅人に氣分の境をささせる地勢に在つた。

山間の險しい道を、腰のたわむほど澤山の荷物を背負つて、喘ぎながらヨチ／＼

と登つて行く、六十ばかりの老法師と一緒になつた。こちらから聲をかけなければ、何時まで經つても言ひさうもなく、愉快で居るのか、不愉快でゐるのか、一向見當のつかない、無愛想な表情で、たゞ黙々として細い脛を運んで居る。

先方がどんな心持で居るか知れないのに、愁ひなことを言つて、却つて感觸を害するやうなことがあつても、本意でないと思つたが、ひよろ／＼した老體には、其の背負つて居る荷物が、いかにも重過ぎるやうに見えて、氣の毒でならない。

「大分荷物が重さうだ。お宜しくば此の馬におつけなさい。」

老法師は、目脂めじのついた汚ない顔を、馬上に向けながら、少しく相格を崩した。「御深切様に有難うございます。」

「どちらまでお行きですか。」

「上松あげまつへまゐるのですが、今日も早正ひら午下り、行き着いた宿で泊ります。」

「秋に入ると、目立つて日は短かくなります。」

芭蕉は馬から下りて、老法師の荷物を馬につけさせた。そして自分は其の荷物の間に、また乗り直した。ところが鞍はぐらつくやら、荷物には挟まれるやらして、少しも安心して居られない。道は益々峻しくなる。

四十九

其夜は、道連れになつた老法師と、一つ宿に泊つた。芭蕉は寝る前に、晝間道中で見て来た山水の雜感を書き記して置かうと思つて、煤けた行燈の下に蹲つて、矢立を取出しながら、思ひ出さうとして目を閉ぢたり、頭を軽く叩いたりして、いつまでも寝ようとしなかつた。

老法師は、芭蕉の其の様子を見て、何か心中に悩み悶えてでも居るものと、飛んだ感違ひをしたらしい。

「一樹の蔭に宿るすら、他生の縁と申します。まして斯うして、一つ旅はたしや屋で御一緒いっしょに寝るとは、餘程の御縁でござります。何ぞ御心配ごとでもおありならば、此の老衲にお聞かせ下さい。」

「別段心配なこともありません。」

「阿彌陀如來を御信心にさへなれば、功徳くどくによつて、一切の苦厄はまぬかれます。」

「有難うございます。」

「人様をお慰め申すのは、出家の持前でござります。まして今日は御深切に、重い荷物を馬につけて頂きました。」

「はう。」

老いさらばいた田舎法師が、愚にもつかないことを、くどくしく述べ立てるの

には、芭蕉も閉口した。

泊つた家は、旅舎とは謂ふものゝ、ひどいあばら家だ。柱は歪んで、障子の立てつけの間が、細い三角形に空を切つて居る。天井は墨を塗つたやうに眞黒い。壁の破れ目からは、星の光が青く瞬いて居る。何處か其の邊の家で、夜仕事に細工物でも拵ふのか、板を挽いたり、木を削つたりする音が聞える。鹿でも退ふらしい人聲などもする。總ての情景が侘しくて、いかにも秋の心を表はして居る。

義經の袴のやうなものを穿いた、見るから田舎者らしい、人の善良さうな亭主が、一行を風流な人と見たらしく、氣を利かせて杯盤を持ち運んで來た。そこで亭主にも一座して貰つて、盃のやり取りをした。

酒は地出來ちできの麴臭い不味いものだが、場所が田舎の旅宿だけに、殊に永年思つて果し得ずに得た、山の國木曾路の旅に在るだけに、臭い酒も鹽辛い菜さいも、一向に苦にならない。木製の大きな盃には、野暮な蒔繪などが不細工に施してあつて、氣の

利いた都會人などは、手にしたゞけで、恐れをなすやうな品であるが、貧僧に似た生活をして居る芭蕉には、酒興が湧いて、それすら玉盃のやうに面白く思へた。

五十

寢覺の床に出た。臨川寺といふ小さな禪寺の境内を通り抜けて、崖の邊を少し下ると、意外な奇景が、眼の前に展開された。激流の浸蝕作用を受けて、直方狀節理を呈した、巨大な箱のやうな花崗岩の並立する、其の岩と岩との深く落ち込んだ間に、川上から奔馬のやうな勢で、猛り狂つて流れ來た水が、急に狭められて、恰もがもいて脱出を企てようとする龍蛇のやうな水相を現出する。

ところが岩の屏風は、可なりの角度で方向を轉じて居る。ために水は勢を抜かれて静かな淵となる。流れて居るのか止まつて居るのか、殆んど見分けのつかないほど静平な淵となる。水色は極めて明麗なのだが、とろりと深く湛へて、黒水晶のやうな、物凄しい陰影を宿して居る。岩壁の盡きた處、河幅は再び以前の廣さに立歸つて波を逆立て、流れ走る。

東の空にかゝつて居た雲が切れた。雲が切れても、なほ其の奥の高い空間に、動かぬ雲のやうなものが隠見して居る。雲は刻々薄らいで、秘密の幕を排した。其處に、花崗岩の露出であらう、頂上を雪崩なだれの落ちかゝつたやうに白くして、残りの八分通りを桔梗色に染めた、崇嚴な峻嶺が現はれた。先に、動かぬ雲のやうに、雲間に見えたのは、其の峻嶺の頂邊の一角であつたのだ。

其の峯の複雑なこと、巖々の深いこと。芭蕉は是まで四方に周遊して、可なり多くの山々を見たが、これほど驚異の目を以て仰いだ山は稀であつた。群山を前後左

右に跪坐させて、卓然と雲表に聳えた其の高さ深さ、宛ら天壇とでも謂ひたいやうに思つた。山の名は知れた。『三十六峯八千谿』の稱ある駒ヶ嶽であつた。

上松あげまつは、木曾川を抱いて山に圍まれた、割合に賑かな村邑であつた。旅宿の泊り心地がよかつた。此地で同道の老法師と別れた。木曾川は何處まで行つても左側から離れぬやうに見えた。山々の樹木は、黄に紅に色づきかけて居る。細い道にはこぼれ松葉が堆く、踏みしだくと、濕氣を含んだ匂がふんとする。百舌鳥が、疇走つた聲で高鳴たかなきして居る。

山の裾と岸の高い川縁とが、恐ろしく狭まつて、道の曲折が多くなつて來た。所謂木曾棧道に差しかゝつたのだ。五六株の太い松が根を張つた道側の岩壁から二三十間もあらう對岸の、これも松の多い城壘のやうな岩角を目がけて、危い橋が吊られてある。藤蔓のやうな種類のを、太く長く緬ひひ合せて綱なわに作つたのを、幾條となく交錯まじりさせて、足の踏むところを、籠目のやうに綾あざに組んだ、橋といふよりも

吊綱つりづなに似た、渡らば纒むすかに渡り得られるらしい、危険な奇觀を呈して居る。これが豫あらかて聞いて居た棧橋かけはしであつた。

橋の下は木曾川だ。上流から勢ひ込んで來た水が、此處で急に折れ曲らうとして、岩壁の一方に突き當る。押し戻される。幾つとなく大きな渦を卷く、龍の勢揃ひしたやうな浪頭を立てる。轉じて靜やかな淵となる。玻璃を水面に當て、覗くやうに、底の底まで青く澄んで見えるが、どのくらゐ深いのか見當がつかない。試みに竿でもさして見たならば、直ぐにも底に届きさうで、其の實一向に手答へなく、知らぬ間に竿は全長を吞まれて、尙足りないであらうと思はれる。

馱馬を引いた、樵夫らしい男が通りかゝつた。芭蕉等が立止つて眺めて居るのを見て、自分も立止つて、自慢さうに氣輕な口を利いた。

「佳い景色でございませう。此邊は木曾山中で一番といふ處だ。」

「山もよい。水もよい。珍らしい景色だ。」

芭蕉が寝めると、樵夫は我が物のやうな顔をして、目の前の山を仰ぎながら

「此の山などは、生へた樹で、地肌が見えませんが、中は質の良い花崗みかげの一枚岩だ。水も御覽なせえ、この綺麗なこと。」

「凄いほど綺麗だ。随分深さうだな。」

「一番深い處は橋の直ぐ下だ。三丈ぐらゐある。落ち込んだが最後、どんな水練の達者でも、ついぞ助かつたためしがねえ。てんで死骸が見つからねえ。其の筈だ。水底の岩は、奥の知れねえほど、深く抉えぐれて居るのだ。」

樵夫の過ぎ過ぎるのを見送つて居た芭蕉は、地獄の谷を綱で渡るやうな棧橋に、再び目をやつた。

棧橋かけはしや命をからむ蔦かつら

木曾川と御嶽川との落合ふ少し手前で、遙かの天半に見つけ物をした。起伏する幾多の山々を前に控へて、均整状の山容を紫紺色に染めた、一大雄峯が特立して、最も高い空間に於て、天と親しんで居るのが、フト目に止つた。それは木曾第一の高山の御嶽であることが問はずして知れた。

地形を按ずるに、先に見た駒ヶ嶽と、此の御嶽との、兩山の餘脈が左右に延びたところに、自分達の今歩きつゝある、長大な木曾の谿谷が構成されて居るのだ、と芭蕉は思つた。

江戸を去ること六十八里。京都を去ること六十七里。東西兩京の殆んど中間に位置して、此の街道中での、一番繁華な福島に來た。日は未だ高いので、此地には

泊らずに、番所を越えて、更に宮の越まで、のすことにした。行つた先の宮の越は治承の昔に、木曾の冠者が遙かに頼朝と呼應して、平家討伐の兵を擧げた舊跡であつた。

南方へ木曾川を流し、北方へ信濃川の一源流をなす奈良井川を流して、太平洋と日本海との分水嶺を形成して居る、鳥居峠に差しかつた。

木曾路の嶮が將に終らうとして、日本一の高い峠を構へて居るのが此處である。初秋の山風が涼しく吹いて居るのに、全身に汗をびつしよるかきながら、杖を力に登つて行つた。可なり高い附近の群山が、だんくく目の下になるといふのに、峠の頂點にはまだ達しない。登れば登るほど、『山は人面より起り、雲は馬背に傍うて生ず』といふ景觀を呈して來る。この自然の大いなる工藝に對して、芭蕉は今更のやうに禮讚の情を寄せた。

漸く峠の頂上に到着いて、いよいよ下り坂にならうとした時には、思はずほとと

した。名古屋以來馴染を重ねて来た、木曾川の上流とは、峠の彼方に於て既に別れてしまつたのだ。是からは奈良井川に添うて北するのだ。奈良井の宿しゆくから洗馬せんば、洗馬から鹽尻へと向つた。

附近の山々は、割合に低く柔らぎを見せて、道は爪先下りになつて来たが、左方十數里の漠々とした上空に、又しても桔梗の蕾のやうな頂巔を見せた、幾座の山嶽が、天から下つたか、他から盛り上つたかといふ風に、長城のやうに限り無く連なつて居る。よく見ると、馬の鞍のやうな山勢を示したのもある。蒼空を突かうとする槍の穂先やうな、稜々としたのもある。それが何れも一萬尺前後の峻峯と推測された。

旅の日數の重なるにつれて、秋も漸く本當に秋らしくなつて来た。芭蕉の顔は日に焦げて、瘦せた金佛のやうになつてゐた。信州も可なり奥まで入つたのだ。松本の城下も過ぎて、今度の旅の眼目であつた更科に着いた。

姥捨山は、南の方一里ばかりの處にあつた。見たところ、さまで高くもなく、嶮しくも無く、心なしのせいか、たゞ何となく、哀れげに峙つて居た。

既に名古屋を出る時に、道中の大凡の日程と、月の盈缺との關係を考へ、そして旅も捗つた途中からは、空にかゝる上弦の月の、夜なく輪廓に圓みを帯びるのを樂しみながら此地へ來つたのであつた。

其夜は幸ひに明るかつた。空は水色に澄み渡つて、一片の織空すら無く、銀盤のやうな明月か、影さやかに照り渡つて、視界は眞晝のやうであつた。

姥捨山は哀かなしい物語を有つて居た。——昔、或る男があつて、幼少の時に父母に死別れてしまつた。其後は一人の伯母を親のやうにして、漸く育つて來たのだが、年頃になつて妻を迎へた。ところが其の妻といふのが、非常に心の邪慳な女で、永年夫の世話になつた伯母を、目の敵のやうに邪魔にして、間がな隙がな夫に讒訴をした。夫は初めのうちは、容易に妻の言ふことを信じなかつたが、何時とはなしに

妻の愛にひかされて、つい伯母を疎んずるやうになつた。そこで或日伯母を騙して背に負うて、山へ行つて捨て、しまつた。老衰して足腰の立たない伯母は、身動きも自由にならずに、たゞ悲しい聲で後を追うたが、男は振向きもせず家に歸つて来て妻の情に溺れて居た。

けれども妻を思ふ心の其の間隙に、小さい時から親のやうに、世話になつた、伯母の面影が時々入つて来て、どうにも氣が咎めてならない。心の落ちつきは失はれてしまつた。或る夜、男は我が家の軒に立つて、捨て去つた伯母の居る山の方を、遙かに眺めた。けれども伯母の顔の見える筈も無ければ、聲の聞える筈も無い。たゞ山の峽から、月が赤々と出てゐるだけであつた。男は我にもあらず咽んだ。懺悔の涙が流れて來た。思はず山を目がけて走つて行つた。さうして再び伯母を背負うて、元のやうに連れ歸つた——、といふのだ。

芭蕉が遙々と憧れて來た、月の名所の更科の月は、彼の心を頻りに止めて、其の

翌夜の冴えた月色を、再び彼に見せた。

五十二

長野へ來た頃は、旅の衣が坐るに寒かつた。山國だけに秋の進行は早く、紅く染つた漆や楓の落葉が、顔や胸の邊をヒラ／＼と見舞つた。日の光も薄い。

善光寺平野の盡さる處に、連亘した丘陵を背負うて、善光寺の大伽藍は構へられてあつた。佛徒は心竊かに、伊勢の大廟と對比して居るとさへ稱されるだけあつて、實に雄麗壯嚴を極めて居る。本尊は閻浮檀金だんごんの阿彌陀如來で、渡來して一たび、難波の堀江に投げ込まれた、日本最古の靈像であるといふことだ。人苟も現世に生

を享けて、必ず此の寺に詣てなければ、來世の成佛が覺束ないものゝ如く、賽者は夥しく、香煙は晝夜絶えぬらしい。

川中島の古戰場を見ようとして、町を出はづれた。夏の早い頃ならば、蕎麥の白い花が日の光を呼んで、一村悉く雪の野のやうに見渡されるといふ、廣々とした畑の道などがあつた。

犀川の流域には、穂の白い芒や、枯れかゝつた蓬が、寒々として秋風に靡いて居た。茶店に休んで、今來た方を眺めると、遙かの空の奥に、又しても初對面の、險峻な山々が嚴かに聳えて居る。距離は遠いが、山靈は直ちに來て、芭蕉の懐に入つた。芭蕉の魂は直ちに行つて、山靈の直下せきげに參した。

芭蕉は指して亭主に訊ねた。

「彼方の、あの立派な凄く見える山は何と謂ひます。」

「あれが戸隠山です。今日あたりは大分寒いやうですから、最うあの山に雪が來か

かつたのでせう。」

「其の右の方に、少し雲をかぶつて、むつくりと立つて居るのは。」

「飯綱山いづなざんです。後ろに續いて居る黒姫、妙高と合せて、此の邊では三すくみ山と申して居ります。」

なるほど見やうによつては、蛇と蛙なまぐじと蛙なまぐじのやうな山容を示して居る。

山に圍まれた信濃の天地は、初秋から一足飛びに、冬が裏づけられて居るやうに思へた。同じ潤葉樹でも、種類によつては、まだ青味の保たれまゝで居るのさへある季節なのに、權威のある高い山を眺めると、最う笑つては居なかつた。日に／＼冷氣に瘦せて行つて、やがて人をも近づけぬ、雪の府城となる覺悟を、今から最う示して居る。其の姿に眺め入つて居た芭蕉は、天地自然の非情から來る、或る冷かさに當面した。けれども彼にあつては、其の取りつき憎い寂寥を、『眞』を観る讚美の精進によつて、容易く打消された。

謙信と信玄とが仕合をしたといふ、『三太刀七太刀打合の跡』といふのを、田圃の中の畦道に見て、頂點の三股になつた西條山を後ろにしなから、岸に楊柳の多い千曲川を下つて、再び長野に引返した。

旅宿の食膳の小皿に上つた大根は、味の繊細な、香の柔かな、夏大根では無かつた。無愛想に給仕をする女中の手指は、膨れて赤らんで妙に光澤をもつて、霜やけになりかゝつて居る。戸の隙間から來る風に、思はず襟を搔き合せた。

身にしみて大根辛し秋の風

五十三

去年、秋の深くなりかけた頃、江戸を立つて、海道を西に行つた芭蕉は、今年また、天地に滿つる秋の中を、淺間嵐に吹かれながら、山道を北から江戸に歸つて來た。恰度一年振りである。

待ち侘びて居た知人や、門下の人達は、彼が深川の草庵に入つたと聞いて、入り交り立交り訪れた。葛飾の素堂もやつて來た。見ると柱の釘に、茶色の羽織がかけてある。風雨に染色は褪せ、縫目の隅々は擦り切れ、裾は破れて、新らしかつた時とは、別物のやうな體裁になつてしまつたが、それは慥かに、去年の秋の末頃、芭蕉が旅に立つ時に、餞別として素堂より贈つたものであつた。

「私の差上げました羽織が、御主人のお供を了をうせて、歸つてまゐりましたな。」
里子にやつた我が兒に、久し振りに對面でもしたやうに、素堂は座を立つて行つて、羽織に手を觸れて見たりした。

「大切に着て歩いたのですが、こんなになつてしまいました。」

「お歩きになつた旅の日數や、里程や、風雨の模様までを、此の羽織が黙つて語つて居ります。」

「暑さに寒さに、始終身邊を離れなかつた品と思ひますと、性は無くとも可愛い氣持がします。」

永らく不在にしたので、草庵の周圍はまた荒れて居た。芭蕉の葉は破れながら、主人の留守に立ち盡して居た。庭の面には枯れかけた雜草が離々として、池の中には病葉わづはなどが散り込んで居た。芭蕉は毎日氣の向いた暇々に、それらの手入をするのが、落附いた心持を得るための、一つの楽しみであつた。

間もなく後の月の當夜が來た。身體はまだ木曾路の旅に瘦せたまゝ居たが、天邊の明月を仰ぐことに、決して飽きは來なかつた。燈火のいらぬほど明るい夜を小庵の裡に寛いで語りたいと思つて、心易い二三の人々を招いだ。

其角は飲酒家だけに、固い小さな秋茄子の辛漬などを肴に持つて來た。そして

「花より團子、月より酒——。叱られませぬうちに、先手を打つて置きます。」
など、言つて、快濶に笑つた。

い、月見の宴が出來上つた。其角は先づ誰よりも、酒氣を帯びて來た。

「御旅行中に、お感じになつたことでも、お聞かせ下さい。」

「長途の旅であつただけに、見し聞たことも數多いが、何から話してよいか緒口に困る。」

「お浮かびになつたことを、何でもお話し下さい。」

「この夏、岐阜の長良川で鶺鴒舟に乗つた。漁師は一人で十二羽の鶺鴒を使ふために十二筋の綱を一手に纏めて握つて居るのだが、篝火はさまで明るくもないのに、鶺鴒も亂れず綱も纏れず、手捌きは實に鮮かなものだ。感心したので、漁師に其の要領を訊ねて見たところが、最初に先づ纏れの少しも無い綱を捌き、次に少し纏れかけたのを捌く、すると六ヶしく纏れた綱は、ひとりでに捌けて來るといふことであつ

た。これには何か他に、教へられるものゝあるやうな気がしました。」

「道によつて賢しとは、能くも申したものでございますな。何事にも其の呼吸が大切と存じます。」

「信濃は流石に山國だ。富士山よりは低いかも知れないが、見たところ、富士山よりも高い感じのする山が、幾座あるか知れない。それが各自に獨特の山勢を示して、此の立派さを見て呉れ、此の高さを見て呉れと言はんばかりに、雲を巻き雲を舒べながら、上空に聳えて居るのだ。あんたのやうな都育ちの人には、殊に見せたい気がしました。」

「いつか一度は必ず出かけます。」

「姥捨山の月も好かつた。何處から見ても、月の色に變りは無い筈だが、眺める場所によつて、感じはまるで違ふ。都にて月をあはれと思ひしはなかにあらぬさびなりけり——と、西行法師の歌つた通りだ。」

「いかにもと存じます。」

「木曾の宿で、道連れのお法師と一緒に泊つたところが、私が晝間見て來た景色のことを考へて居るのを、何か心配ごとでもあるものと當て推量して、長々と阿彌陀様の功德を、説き立てられたには閉口しました。」

五十四

(245)

秋も盡さる頃となつた。垣根のあたりに、少しばかり咲いて居た朝顔は、葉は萎み花は小さくなり切つた。日脚は著しく短かくなつた。夜になると縁の下で、よく地蟲が遠々しい鳴音を立てた。

すべての形式を離れて、内部に深く自己を培つて居る芭蕉には、身を市井に置いて、心は常に山中に居るやうな、物静けさに在つた。獨坐の姿に、心に佗しい折などは、自分で竹を割つて、細く削つて、笠を作つて見たりした。併し手際が拙いので、徹夜したところで、なか／＼捗らない。そこで昨夜は紙を重ね貼り、今日はそれを日に乾かし、明日は澁を塗るといふ具合にして、二十日以上もかゝつて漸く出来上つた。出来は出来だが、糊加減のわるいせいにか、外の方に反りかへつて、まるで蓮の葉のやうな形だ。併し彼には蘇東坡の雪見笠や、西行の富士見笠などが想像されて、なか／＼興を覺えた。

秋も更け切つて、冬枯の季節に入つた。障子は小さな破れ目すら、繕はずには置けぬほど寒くなつた。時々寒などが催した。葉を悉く散落してしまつた樹木は、無い袖は振れぬといふやうな姿をして、疎らな枝梢を空間に顫はして居る。

飽くまで寂しみに徹して、そこに心と物との眞を掴むことに、常に一念を托して

居る彼は、人が訪れて来れば格別だが、さも無い限りは、態々自分の方から出かけて行かうともしなかつた。

冬籠りまた寄り添はん此の柱

静物の細い柱までが、昵んで居ると、言外に物を言ふ。斯うして彼は、眞に孤獨を味ひながら、自己の生命の象徴の、自己の姿を見詰めて、あつた。

それでも偶には、只今田舎から僧達二人來ました。俄のことゝて、出すべき物もないので、寒さ凌ぎに養うめんを拵へましたが、酒が少々欲しいのです。肴には粒納豆を茶碗に入れて下さい。そして貴方御自身にお持ちになつて、萬事お世話のほどを頼みます。ついでながらお引合せもしませう。早くお越しの程を、お待ちして居ます——といふやうな意味の手紙を書いて、懇意な商人の許へやることなどもあつた。

年は暮れて、早春の季節になつた。樹木はまだ去年の冬枯の儘で、寒さも一向去

らないが、それでも何處かに、暢々として明るい感じが、日に／＼催すやうになつて来た。

——過ぎ行く光陰も、旅を行く人も同じことだ。生涯を舟に浮べて居る船頭も、馬の手綱をとる馬士も、日々旅にあつて旅を往處として居るのだ。昔から旅を續けて旅に死んだ人も多いことだ。自分も生れつきで、何時の頃からか、常に雲水の情に誘はれて、漂泊の思の止んだ時が無い——芭蕉はこんなことを考へながら、今度は遠く奥州から北陸地方への行脚を思ひ立つた。

「私は今度、まだ見たことのない、奥州の果てから、ずうつと北の海の方へかけて歩いて来たいと思ふ。」

門下の人達は、東北地方の風景を、一種異つた荒涼としたものに、漠然と想像しながら

「結構なこと、存じます。併しまだ餘寒の厳しい折柄で、今直ぐの御出立は、御健

康に如何かと案じられます。」

と氣遣つた。

「それでは、最う少、春暖に向つてからにしませう。」

彼は素直に皆の言ふことを容れた。そしてやがて、思ひも遠い陸奥むつに旅立つ日の来るのを、静かに楽しみながら、脚絆の綻を繕つたり、笠の紐をつけかへたり、脚に灸をすゑたりして、徐ろに其の準備をした。

今度の旅は、彼自身にも、多少の不安すら感じられるほどの、馴れぬ地方への長途の旅で、幾年かゝるやも、殆んど豫測が出来なかつた、それに草庵は最う破れかけて居る。歸つて来るまで満足で居るかどうか、甚だ覺束なかつた。そこで彼は、愛する芭蕉に就て、旅先で案じなくとも濟むやうに、少し離れた籬の外に移し植ゑて、懇意の人に面倒を見て貰ふやうに頼んだ。『此處もまた我れ住み憂くて浮かれば松は獨りとならんとすらん。』西行が跡に残される松に寄せた心持に、直ちに彼が

芭蕉其者に別れ行く心持であつた。

五十五

一枚々と紙を剝ぐやうに、寒さは追々に薄らいで、水は温み、草木は青みかけ陽氣はぼか／＼として来て、方々の花便りは頻であつたが、それも何時とはなしに下火になつて、櫻も最う散りかけるやうになつた。

心待ちに待つて居た、旅立の日がいよいよ来た。供には曾良を連れて行くことにした。

出發の朝は未明に起きた。有明月が殘夢のやうに空に懸つて、地面には霧が這つ

て居た。顔を洗つたり、旅仕度を整へたりして居るうちに、味爽の空間がだん／＼明るくなつて、富士の姿が、微かに遠く浮んで来た。

親しい人々は、前の晩から草庵に来て居て、一緒に舟に乗つて送つて呉れた。堀を出て、春の水の緩く流れる、まだ朝景色の隅田川を上つて、千注の大橋で、舟から上つた。

「長途の御旅のことでございますから、吳々も御身体をお大事になさりませ。」

「遠い奥州への御旅立、思つて見ましたとけでも、適あたかな心持がいたします。」

「曾良殿、よく氣をおつけ下さい。お頼みしますぞ。」

一同は道の傍に居並んで、二人の後姿の見えなくなるまで見送つて呉れた。

檜木笠の下に、秀れた詩想を藏つた芭蕉と、實直でまめ／＼しい従者の曾良とは道側の小川に、鮎たなごや鱒などの群をなして居るのを見たり、遅咲の八重櫻や、緋桃や金色に燃える菜種の花などを眺めながら、無患子むくろじや榛の木之處々に立つ、奥州街道

を北に向つた。まだ江戸の土地を、僅かに離れたばかりであるが、これから先の長い旅路を思ふと、『前途三千里』といふやうな、遙々とした一種の旅愁を覺えた。

千住で、人々と別れを惜んだりして、午下まで暇を取つたために、草加の宿に着いた時は、遅々とした春日も、暮の色に刷かれかけた。二人は旅の一夜を、此地で泊ることにした。

なるべく身軽にと思ひながらも、夜の寒さを防ぐための紙子、または雨具、筆や墨、其他いろいろの物を、饒別に人々が贈つて呉れた。折角の志と思つて、皆持つては來たが、瘦骨の肩には、最う荷厄介になつて來た。こんなことならば、初めから何うにか處分をして來ればよかつた、などと、思ふやうになつた。

日光の山麓に着いた時には、時候は晩春といふよりも、既に初夏の光景であつた。其の夜泊つた宿の亭主といふのは、餘程風變りの男で、『私は佛五左衛門と申します生れつき正直ですから、人がさういふ名をつけたのです』と、稼業離れのした待遇

をして呉れた。見たところ、極めて無智で、正直な男らしい。

二荒山神社に參詣した。男體山の頂上には、まだ雪が少しく残つて見えたが、大谷川の澄明な水色には、既に涼しい影が流れて居た。繁り合うた樹木には、太陽が金色に降り注いで、艶のある若葉の其の隙間から、光線が煙のやうに、匂のやうに滲透して、天地の萬象悉く信仰に燃えるといふ風に、光覺は眩しかつた。彼は斯うした天然の裡に包まれて、無心に茫然として、暫く立つて居た。

山道を二十丁ほど登つて行つて、裏見の瀧に行つた。岩壁に身をすり寄せて、落下する水の柱を裏面から見ながら、若葉を濡す雨のやうな飛沫に、山を登つて來て汗ばんだ肌膚を涼しくした。

黒羽に知人があるので、それを尋ねるために、野越しに直道を企てた。遙か彼方の山の根に、村落のあるのを目標にして行つた。折悪しく雨が降り出したのみならず、日暮に間が無いので、最寄りの農家に泊めて貰つた。

翌朝も、昨日の續きの野中を、黒羽へと歩いて行つた。那須の高原は廣々として居る。行つても、行つても、目路の盡くる限り、たゞ遙かな碧落と、漠々とした草土との接する平蕪であつた。一度道を間違へれば、飛んでもない方へ出てしまひさうな、地勢になつて來たので、ほとく閉口した。

フト見ると、ずつと彼方に、野放しの馬が居て、其のまた彼方の離れたところに、百姓らしい人影が動いて居る。二人は地獄で佛に會つたやうな心持で、脚を早めて其の方へ近寄つた。

「黒羽の方へ出ようと思つて、此處まで來たのだが、道が不案内で困りました。」

「此の野原は道が縦横に岐れて居ますで、初めての旅の方には無理でがす。」

草を刈つて居た百姓は、ぶつきら棒に言つた。

「何とか分別を貸して貰へまいか。」

「それでは此の馬に乗つておゆきなさい。此の馬は始終往復しますで、道をよく知つて居ます。二里ほど行くと村の入口があつて、馬が立止まる筈ですから、其處で下りて、馬を歸して下さい。」

「それは忝けなう。」

「道の分らないのは困るもんでがす。」

芭蕉が馬に乗つて、曾良が従つた。手網を取る必要もなく、至つて柔順な馬だ。あとから其の百姓の子供が二人して、面白さうについて來た。中の一人は女の兒だ。色の黒い丈夫さうな無邪氣な兒等だ。

百姓の言つた通り、凡そ二里ほど來たと思ふ頃、一村落的の入口に出た。果して馬は脚を緩めて、やがて立止まつた。馬から下りた芭蕉は、獨りで野道を往復する、

感心な馬の鼻面を撫で勢はりながら、若干の青錢の孔に藁を通して、落ちぬやうに鞍壺に結びつけた。「歸つたら親爺さんによく言つて呉れ。」

子供達は側まで來ずに、離れて此方を見てゐたが、芭蕉に言はれ黙つて頤をあんぐりとした。馬は尾を拂ひながら、もと來た方へ、テクリ／＼と歩き出した。

黒羽の淨法寺の知人は、芭蕉等の思ひかけぬ來訪を受けて、飛び立つて喜んだ。勧められるまゝに、幾日も滞在したが、居心地がよくて、まるで親類へでも來たやうな、安易な氣持であつた。其の弟の桃翠といふ俳人も、間がな隙がな來て、心易く語り、自分の家へも連れて行つて呉れたりした。

滞在中に處々方々を見て歩いた。昔、犬追物いぬおぼりの催しのあつた跡だといふのを尋ねたり、實朝が『叢たばしる』と詠んだ那須の篠原に分け入つて、玉藻の前の古墳だといふのを見たりした。那須神社にも參詣した。與市が屋島の沖で、扇の的に向つた時、衆目の中て若し射はづしたら、屠腹するほどの切ない思ひで、『別しては我が

那須大明神』と、瞑目して只管に念じたのが、此の神社なのだと思ふと、殊に思はせられることが深かつた。

雲巖寺へも行つて見た。寺の據つて居る山は、なか／＼奥深く、峡谷の間に僅かの逕があつて、松や杉の老木が黒く空間を蔽ひ、岩清水が苔の間に滴り、嵐氣が深く、五月の季節と思へぬほどに冷涼である。

一步を移す毎に、眼前の景色は別物のやうに一變して、森となり、崖となり、峯となる。橋を渡つて山門に突き當つた。堂宇をぐるりと廻つて、背後の山に攀登つて見たところが、以前佛頂禪師が幽かに住んで居たといふ、岩窟に結びかけた小庵があつた。

それは纔かに、雨露を凌げば凌げるといふだけの、本當に形ばかりのもので、世に謂はれる清泉禪師の『死關』や、寶雲禪師の『石室』なども、斯うしたものであつたらうと聯想された。

知人の家に別れを告げてから、馬に乗つて、殺生石を見に行つた。手綱をとつた馬方といふのが、餘程變つた野男で、芭蕉を文人と冗たらしく

「駄賃を半分にまけますから、歌か發句を一枚書いて下さい。」

と出し抜けに言つた。優しいことを言ふ男だと芭蕉は思つて、馬背に揺られ行きながら考へた。恰度其邊の青葉の森の中で、山杜鵑が頻りに鳴いて居た。

野を横に馬引き向けよほとゝぎす

彼は其の即興を書いて、馬士に興へた。馬士は大層に喜んで、嬉しさのあまり持

つて居る手綱の先を振りまはしながら、どこまでも供をするやうな意氣込をした。殺生石は温泉の湧出する峽の奥の、石塊の壘々と散ばつた山の麓部にあつた。殺生石といふのは、可なり大きい褐色の岩石であつた。其の岩石を中心にして、周圍には今尚ほ毒氣が搖曳浮遊して居ると見えて、羽蟲の類が、附近に斃死して居た。山と山との間から、流れて来る一筋の小川が、賽の河原と稱する焼石のごろごろした中を、炎天に白く光りながら、東に向つて峽谷を落ちて行く。

石の香や夏草赤く露暑し

來る途中の三四里先から、遙かに仰いだ時には、天空に瑠璃色を呈して居た那須の主峯が、今この高原の盡きて、將に山嶽にならうとする處まで來て、改めて仰ぎ見ると、山一面に灰褐色の溶岩を吹き散して、巨大な臼状をなした絶頂が煙を吐きつゝ、直ぐ眼前に悠然と聳えて居るのであつた。

下野と磐城との國境をなす蘆野に來た。此處には、其の昔詩僧西行が、柳の蔭の

清水を飲んで、暫く草原に腰をおろして休んだ舊跡と稱される、見るから涼しげな場所が残つてゐた。柳も矢張りあつた。小丘の斷層面をなした、粘土質の竅穴から冷たい透きとほつた清水も今以て吹き出て居た。

白河の關にさしかゝつた。能因の『都をば』といふ和歌や、平兼盛の『たよりあらば』といふ和歌などが思ひ出された。京都を遙々と離れ來て、遠く陸奥に下つた昔の官人や、草を枕に漂泊した風騷の人達が、奥羽の咽喉を扼して居る、此の關所を越えると共に、いよ／＼都の方と絶縁して、雲煙の迷ふ異域に、足を踏み入れたのだといふ風に、情懷を新たにしたり、行人の旅愁といふやうなものも思はれた。

關所の在る處は、山又山が左右から大手を擴げて、僅かに其の麓部の迫り合つた峽に、一路長く曲り紆つて、遠く空間を三角形に切つて居るのであつた。青葉した楓樹の集團が、其の斜面に涼しい陰影をつくつて、風にそよ／＼と動いて居る。朝日に霜の溶けて雫する秋の深い頃には、さぞ紅葉が美觀を呈するであらう、など、

想像された。

卯の花が、雪の長城のやうに咲いて居る丘なども通つた。日光あたりを歩いてから此の方、しば／＼聞き馴れては來たが、晝啼く山杜鵑の聲には、矢張り耳傾けられた。下流五十里の末は、仙臺の荒濱に落ちるといふ、阿武隈川を渡つた。白い瀬波を立て、廣々と流れて居る處もあつた。青く淀んで、魚の走つて居る處もあつた。左方の蒼穹には、會津邊の山々らしいのが、遠く雲煙の間に險峻な曲線を書いて居る。左方には阿武隈山脈が、何處まで行つても、盡きぬものゝ如く、自然の城壁のやうに延びて居る。

いよ／＼奥州に入つたのだといふ感じを囑目の山川草木から與へられた。同時に江戸を立つてから、日數の大分経たゞけに、旅心も漸く落ちついて來た。須賀川へ着いて、等躬を訪問した。

「白河の關をお越えなさいました時には、どのやうな御感想があたりでございまし

たか。

「初めて接する四邊の風景に心が奪はれ、取止めの無い懐古の思などに動かされて、これぞといふほどの、感想も摺りませんでした。」

五十八

郡山へ来た。昔から歌枕などによく詠まれて居る安積泊は、宿から一里ばかり入った桑野村といふ處にあつた。周圍の櫻並木は、水を渡る風に、涼しく青葉を戦がして居た。此邊の特産だと聞いて居た『花かつみ』といふ植物は、どんな花であるかと、里の人に尋ねて捜し當てた。見れば僅かに一莖の小草に過ぎないが、實はそ

れを見て置きたいために、態々此處まで横道を入つて来たのであつた。

長途を歩き續けて来たためもあらう。風土に馴れないためもあらう。持病の痔疾が起りかけて、歩くのに多少苦痛を覚えて来た。けれども『旅』によつて、感激を新鮮にしつゝある芭蕉には、ともすると其の苦痛も忘れがちで、道中で野倒死することも、寧ろ彼にあつては涼しい天命のやうに見えた。二本松に来て、その昔鬼婆が棲んで居たといふ、安達ヶ原の黒塚も見えた。

福島へ来て、信夫の里に文字擢石といふのを見た。案内して呉れたのは、多少文字に親しむ人であつた。『王朝時代の風流な役人達は、數年派遣されて居た任期が満ちて、久しく戀ふる都に歸つて行きます時に、此の石の上に衣裳の袖を片敷いて、青い草汁で、石面の葱の模様を押し染め、再び来ようとも思はれぬ陸奥の、風色の名残として懐かしみながら、立去り行つたものなさうでございます』など、説明して呉れた。

兄頼朝との仲に不和が生じて、國中に身の置所を失ひ颯爽とした羽翼を止む無く收めて、跡を踏晦して僅かに遁れ來つた、九郎義經の心事に同情を寄せて、六十六國の總追捕使である頼朝の勢威をも畏れずに、毅然としてこれを庇護したといふ、佐藤元治の舊跡を尋ねた。元治は繼信、忠信の父だ。それは月の輪の渡頭を渡つて、瀬の上の宿を、一里半ばかり行つたところの、左方の山際にあつた。

丸山といふ處には、城の大手の跡なども残つて居た。附近の古寺には、佐藤一族の墳墓が、杉や其の他の灌木の繁みの中にあつた。正面の柵内には、切石を三段に積み上げたのを主として、左手の方にも、多年の風雨に殆んど自然石のやうになつた墓石が、幾基も散在して居た。殊に彼が心を惹かれたのは、其の中に繼信、忠信兄弟の妻女の墓が、青い苔に包まれて、葉末の露に濡れて在つたことだ。

夫達をつつたちが義經に孤忠を盡すために、身世を南船北馬して、家郷を顧る暇も無く、其儘遂に主人に忠死した後までも、飽くまで夫達の遺志を固く守つて、纖弱い女性の

身でありながら、二人の妻女は終始一貫して、落魄の義經に心を盡し抜いたのだ。若し鎌倉方の手がまはつて、お探ね者の義經を隠匿したことが知れれば、累を身に及ぼすことは明らかだが、彼女等は其の威武に屈しなかつたのだ。——其の事跡を考へた芭蕉の胸には、涙ぐましいまでに感銘が湧いて來た。

感銘は直ぐに消えはしなかつた。——支那の峴山には、晋の羊祜ようこが同行の鄭湛を顧みて『宇宙あつてより即ち此の山在り。由來賢達の將士にして、此の上に登つて遠望する、我と卿との如き者多からん。皆湮滅して聞ゆるなし。人をして悲傷せしむ』と言つて、悵然として嘆じた跡があるさうだ。其の跡へ襄陽の百姓が一基の碑を立てた。爾來山に登つて、其の苔石たいせきの面を見る者は、心無い野人までが、悠久な天地と、果敢ない人生との感慨に惹きつけられて、思はず涙を流すので、誰謂ふとなく『墮涙碑』といふ名がついたといふことだが、それは必ずしも、遠く海の彼方の支那に求めるまでも無く、現に今此處にも在つて存すると思つた。

其の夜は飯坂に泊ることにした。温泉があるので、先づ入浴した。温泉場の設備は不完全だが、湯其者は好かつた。清麗な湯が浴槽の縁から溢れるやうに、波々と湛へられた中に、旅で勞れた體軀を、思ひの儘に寛がした心持は、愉快の極みてあつた。身も心も暢々として、白樂天の所謂『温泉、水、滑らかにして、凝脂を洗ふ』のそれ宛らであつた。

併し宿屋は驚くほど汚なかつた。地面と床板との間には、僅かの空間も無い程に直かに板を並べて其の上に、たゞ筵を敷いたゞけの陋屋であつた。併し草を藉いて

寝る露宿すら、場合によつては厭はぬ覺悟の芭蕉主従は、さまで深く氣にもしなかつた。不味い物も平氣で食べた。燈火の用意すら其の夜は缺いたといふので、圍爐裡の焚火の明りを頼りに、寢床を設けて、妙な臭氣のする、冷たい肌觸りのする蒲團を着て寝た。

夜中頃に激しく雷鳴が初まつた。寢心地悪く漸く眠つた目が覺されてしまつた。續いて俄雨がどしや降り降り出した。屋根から雨がポト／＼と落ちる。蒲團の中が體温で暖まつたのにつけ込んで、蚤だか虱だか知らないが、ムス／＼と皮膚にさはる。蚊はうるさい音を立て、耳や顔のあたりに暗中飛躍をする。とても再び眠れさうにない。幾度となく寢返りをして居るうちに、床板は低く蒲團は濕つぽいためか、持病の痔疾がまた起りかけた。

散々な目にあつて、短かい夏の夜でありながら、明けるのがどんなに待ち遠しかつたか知れない。雷もやんだ。雨も降らなくなつた様子だ。其のうちに漸く夜の白

みかけたことが、戸の隙間からも、屋根の穴からもよく分つた。二人は這々の體で宿を出た。

「宿屋もあのくらゐひどくなると、却つて諦めがつくやうだ。」

芭蕉は笑つた。

「私は構ひませんが、おからだに觸りはしまいかと心配いたしました。」
曾良は主人の健康を氣遣つた。

昨夜碌々眠る暇が無かつたので、頭がぼんやりして、今日の旅は一向に心が進まない。馬をやとつて、雨上りの道を行つた。時々居眠りが出て、はつと氣づいて、慌て、鞍に抱きつくやうなこともあつた。

桑折かうりの宿驛に出た頃は、痔病が思はしくなかつた。前途に遙かな旅程を控へて居りながら、健康がこんなてはいけないと思はぬでもないが、邊土の行脚に一身を任托して、旅から旅への行く先々を、常住の宿と心得て居る彼には、たとひ路傍で倒

れ死ぬやうなことがあつても、それまでの運なのだといふ、諦めを捨てることは出来なかつた。そのために却つて氣力を取戻すことが出来た。

山の裾や野の中の田舎道を通つて、仙臺領の入口になつて居る、伊達だての大木戸を越して、更に燈摺あぶすり、白石などの城下を過ぎて、日數を重ねて、笠島郡に入つた。此處には一條天皇の御不興を蒙つて、近衛中將の榮職を罷められ『陸奥の歌枕を見てもゐれ』との御言葉の下に、陸奥守むつのかみに貶謫された實方朝臣が、再び都に歸る機會の來ぬうちに、此地で死んだといふ史蹟があるのであつた。百姓に尋ねて見た。

「藤中將の墓のあるといふのはどこですか。」

「彼方がみのわ笠島と謂つて、お墓のある處です。かたみの芒といふのも、今に残つて居ます。」

青田を隔て、遙か右の方に見える、森に包まれた山際の一村を指した。そこまでは可なりの道程があつた。殊に雨の多い頃の泥濘の田浦道なので、曾良は行ききた

くなさうな様子であつた。芭蕉はその心持を酌んで、遠く餘所ながら眺めたゞけにして岩沼に向つた。

六十

岩沼には『武隈の松』といふのがあつた。江戸を立つて来る時に、見送つて呉れた舉白が

『奥州へ行かれましたならば。武隈の松と申しますのを、是非御覧なさりませ。御存知でもありませんが、武隈の館には、非常に古い歴史がありまして、多賀城のまだ築かれませんでした、天平寶字以前には、其の武隈の館が、陸奥國の鎮守府で

ありまして、庭前に松を植えましたのが、武隈の松なのでございます。何しろ千年以上も昔のことで、松は幾度か枯れて、代がかはつて居ると申しますが、名所の一つでございます。それに奥州は御存じの通り寒い國で、梅も桃も櫻も殆んど一緒に咲くといふやうな譯でございますから、或はお着さになつた頃、まだ遅櫻を葉隠れに御覧になることが出来るかも存じません——」など、言つて呉れたのであつた。

松は根が土際から二つに分れて、翠の影を空間に投げて居た。代はかはつても、往昔のも矢張り此のやうな樹相であつたらうなどと思つた。そして後拾遺集にある能因法師の歌や、陸奥守に任せられて、都から下つた官人が、幾代前かの此の樹を伐つて、名取川の橋杭にしたといふ記録などを思ひ出した。

さわ／＼と渡る青嵐に、顔を涼しく吹かせながら、臯月晴れの空を水に映して居る名取川を越えて、東北の一都府として知られた、仙臺の城下に入つた。それは恰度節句の當日で、屋並の軒には、菖蒲や蓬を葺き、鯉幟や吹流しが空に翻つて居た。

五十四郡の太守と謂はれた、伊達政宗の據つて居た青葉城は、廣瀬川の長い橋を渡つた、彼方の丘陵に在つた。城廓は針葉樹と闊葉樹とに深く包まれて『青葉城』の名稱は、能く其の形勢光景を象徴して居た。砦の一角に立つて見渡すと、城下の屋敷は一目の裡に収まる。右の方遙かに、荒濱の海潮が、晴れた空と相接して、水と天とを白々と一枚に刷いて居る。

三四日滞在した。旅宿に一書家が訪問して來た。話の様子では、俳諧にも心を寄せて居るらしい。

「折角の御來遊を幸ひ、多少存じて居ります附近の名所を、御案内申しませう。」

「有難い仕合せ、どうぞお連れ歩きを願ひます。」

「風流なお旅の方にお供しますのは、私こそ仕合なのでございます。」

「好んでの行脚とは申せ、土地に不案内では興味も薄いことに思つて居りました。」
心易く言つて呉れるので、芭蕉は其の厚意を受けた。

先づ出かけたのは宮城野であつた。處々に松や杉の立木などがあるばかりで、幾里に亘るか知れないほどの平原である。其の平原一面に、人の肩ほどの高さに繁つて居るものは萩だ。豆團扇のやうな可憐な葉が、隙間も無く重なり合つて、風の吹くまゝに緩やかに動揺して居た。吉野の山中にも萩は可なりあつた。嵐山附近の丘陵にも萩は多かつた。併しこれほど澤山の萩の集團を、芭蕉は未だ曾て見たことが無かつた。そして、初秋の頃、薄紅の花が、枝毎に咲き満ちた眺めは、どんなにか優美であらうと想像した。

玉田、横野などいふ處へも行つた。躑躅ヶ岡には、蜀葵の花が白日の眩しい光線を吸ひながら、無数の花をつけて、によきつとした枝振りで、幾十株となく見事に咲いて居た。

全く陽光が透さぬほど、暗く鬱々として、日中もなほ梢から、冷たい露のポトポトと雫する、松の密林のある處へ伴はれた。

「古歌にも出て居ります。『木の下』と申すのは此處のことでございます。」

「……………宮城野の木の下露は雨にまされり、といふあの歌の名所ですか。」

「さやうでございます。」

「昔も矢張り此の通り、露の多い森であつたと見えますな。」

更に樂師堂だの、天神の御社などいふ處へも、連れて行つて呉れた。

朝早くから案内をして貰つたのだが、方々を歩いて居るうちに夕方になつてしまつた。芭蕉等は是から松島や鹽釜の方へ出るので、畫家と別れることになつた。

「お蔭で名所が詳しく分り、有難く存じます。」

「松島の方へお出でになりますならば、圖面を畫いて上げませう。」

畫家は無雜作に言つて、圖入りの道案内を紙に畫いて呉れた。

「此處でお別れしましても、是を頂けば、矢張り御一緒に、旅をするやうな心持がします。」

「お別れいたします時に、進上致さうと思ひまして、こんな物を今日終日持ち廻りました。」

畫家は斯う言つて、風呂敷包を解いて、麻の緒を紺色に染めた、いかにも丈夫さうな草鞋を、芭蕉と曾良とへのつもりであらう。二足出した。

「重ねくの御親切、忝なく存じます。」

「貧乏畫工のことで、碌々御もてなしも出来ませんでした。高名なお方に圖らずもお目にかゝる仕合を得まして、私こそ忝なうございます。」

芭蕉は、思ひかけぬ風流人に、思ひかけぬ邊で土遭逢して、實意の數々を盡して貰つて、子供が菓子を手握つた時のやうに、無暗に嬉しくてならなかつた。

後世の城廓のやうな、あゝした様式の物が未だ案出されずに、僅かに砦のやうなものゝみであつた往昔に、陸奥の國府の置かれた跡があつて、其處に多賀城の碑なるものが残つて居た。果して其の當時から、在つたものか何うかは知れないが、苔に蒸されて古びて居た。

其の碑面を讀むと、『西』の一字を大書した下に、『去京一千五百里。去蝦夷國界一百二十里。去常陸國界四百十二里。去下野國界二百七十四里。去靺鞨國界三千里』と刻んである。高きに望んで詩でも賦するやうな按排に、四方の國土を漠然と案定した具合。さうかと思ふと、里數を大まかに捨てたり、妙に細かく取つたりした調子が、何となく時代離れがして居るやうで、芭蕉にはそれが面白く感じられた。同時に一千年前の都の人が、遙々東奥の地に官に駐つて、雨に風に思を馳せた、人情の奥から鳴り出づる、郷愁といふやうなものまでが、目の前に想起された。

碑面には更に、此の城は神龜元年に、按察使鎮守府將軍大野朝臣東人の、創めて

設置したものを、天平寶字六年になつて、參議東海東山節度使鎮守府將軍惠美朝臣朝獨が修造したものだといふことが傍書してある。

一見したところ、極めて無味平凡のやうで、よく味はうと一片の無韻の詩の趣ある國境の誌し方、また其の官名や稱呼に漾ふ大時代な匂——。暫く碑面に立ち盡して居た芭蕉の頭には、『時の推移』と『人生の事跡』といふやうなことが、無始無終の天地山川を背景にして、沁々と考へさせられた。

草臥れること其のことにすら、言ひ知れぬ樂しみを覺える、旅の功德に涵りながら、更に脚を東方に進めた。古くから歌書に有名な野田の玉川や、末の松山なども尋ねた。末の松山には寺があつて、大小種々の墓石が、青い草原の彼方此方に、濕つぽく壘々として居た。昔から『戀』とか『契』とかいふやうな情調に、多く結び詠まれた處柄だけに、謂ふところの、比翼連理の幾千代かけた男女の語らひも、覺めて見れば、果敢ない夢に過ぎぬといふやうな、人の世の脆さが何處とも無しに裏づか

つて眺められた。綺麗な羅物を隔て、調體の舞踏を幻に見るやうにも思へた。

鹽釜の浦に出た時には、恰度入相の鐘が物靜かに響き渡つて、夕暮の紫色にくすんだ潮が、ひた／＼と岸の白い砂を洗つて居た。夜の暗さに移つた。間も無く雲の切目から、黄ばんだ月が顔を出した。月光を長く引いた漣の彼方に、籬ヶ島といふのが、墨繪のやうに見える。

沖から船が幾つも歸つて來た。そして濱邊に立集つて、鈍い高い聲で、何か喫舌り合ひながら、鱗の光る魚類を分配して居る。

投じた旅宿は、濱から幾らも離れて居なかつた。磯臭い風が、明けた障子の間から、絶えず吹いて來た。食事も濟んだし、旅日記なども記したので、そろ／＼寢ようとして居ると、襖を隔てた隣室へ、人がどや／＼と入つて來て、思ひ／＼に坐つたり、胡坐をかいたりして、席を作つた様子だ。間も無く絃を渡る妙な撥の音がして、續いて鄙びた調子の聲が張り上げられた。

それは地方の泊り客や、近所の者などが集まつて、盲法師を呼んで、『奥淨瑠璃』といふものを聴くのであつたことが知れた。平家琵琶とも異へば、舞の曲とも違ふ一種變妙なものだ。それに語り手が國訛を著しく發揮するので、よくは意味が分らないが、奥州落した義經の史蹟か何かを述べるらしい。枕元近くでやられるので、暗しくもあるが、併し邊土の遺風といふやうな、地方獨特の情調も偲ばれて、捨て難いやうな心持もした。

朝早く宿を立つて、鹽釜明神へ行つた。露つぼい木立の間に搖曳する、薄紫の霞

が、朝夕を渡つて来る曉の風に吹き拂はれたところに、宮柱の太い、彩縁の美しい社殿が、蜃氣樓のやうに現はれて来た。高く壘み上げた石の階段や、玉垣などが、今しも東雲の空から射しかけた、朝日の光線を受けて、黄色に眩しく照り榮えた。

日本建國以來由緒のある此の神社が、海潮音の静かに通ふ、此の東北の一僻邑を神域として、莊嚴に鎮座して居る光景に接すると、おのづと頭が下つた。

神前に古色の蒼然とした、寶燈があつた。青銅のその扉には、『文治三年和泉三郎寄進』と、字劃鮮かに刻んである。年代を繰つて見ると、燈籠の出来た當時と、現在それを眺めて居る生きた芭蕉との間には、五百年の長い星霜を隔て、居るのだが作られた燈籠が物を言ひ、刻まれた文字が物を言つて、今古の間只一枚のやうにも思へた。

和泉三郎は、藤原秀衡の三番目の倅であつた。失脚して奥州落をした、不遇の義經に同情して、専ら擁護した秀衡は、將に病死しようとした時に、自分の遺志を繼

いで、飽くまで義經を守れど、倅共に言ひ置いたのであつた。ところが腑甲斐の無い兄泰衡は、父の死後間も無いうちに、頼朝の威風に怖れて、自身や一家の安全を得ようがために、淺墓にも義經を弑して、關東の意に迎合したが、結局は自身も殺されるやうな事になつた。けれども、獨り三郎は其の間に在つて、凜として動かなかつた。父の遺命を守り、利害を捨て、最後まで義經に味方し、遂に義經と一緒に討死して、東奥男子の氣を吐いた義人であつたのだ。

芭蕉は燈籠の文字に目を注ぎながら、功名も、富貴も、生命も一片の塵のやうに觀つゝ、唯意氣に終始して、主と父とに殉じた、素晴らしい彼の氣魄に對して敬慕の情を坐ろに寄せた。

太陽が高く登つて、程なく正午にならうとする頃、松島の風景に接するため、二里の海上を船で行つた。雄島ヶ磯といふのに着いた。芭蕉が江戸を立つ時に、皆が言つた。『奥州へお下りになりましたならば、松島は必ず御覽なさりませ——』。彼

が松島の風色に臨むことに、門下の人達は、一樣に或る期待を持つたのだ。彼自身もまた、松島に對しては、尋常一樣の心持で來たのではなかつた。扶桑第一と稱される天下の絶景が、おひく眼に入つて來た。彼の詩情は自づと頭を擡げて來た。

左右の腕を延し曲げて、圓を拵へたやうに、岬と岬との間を僅かに開いて、外洋の潮を抱き入れた灣内は、凡そ三里もあらう。其の中に散在する大小無數の島々は人々が箇々に面相を異にするやうに、如何なる秀れた畫家や彫刻家の、筆觸や刀の牙えを以てしても、到底企及し得ないまでに、複雑多趣、千變萬化の線様に成つて海中隨所に布直されてある。そして其の島々の上には、種々雑多な樹相を示した青松が密生して、鏡のやうな璃溜の水に、涼しく影を落して居る。

船は其の島々の間を、靜かに水尾を後に引きながら周遊するのだ。場所によると島嶼の切岸になつて居る、暗褐色の斷崖が、青黒い水の底に喰ひ入つて居るのが、太陽の光線の射角の作用で、可なりの深部まで物凄く窺はれる。

島によつては、岩壁に海草が青く生へて、琅玕の洞窟のやうになつて居る處を、龍宮へでも誘はれ行くかのやうに、世離れのした幻覺を浮べさせられながら潜つた。

雲を趁ひ。水を慕うて、脚に任せて遠く漂泊ひ來つて、此地に到つた芭蕉は、數千萬株の松の常緑色と、不増不減の碧の潮とが、錯綜同交して、涼しい『緑の王國』をなして居る、此の夢のやうな境に入つて、自己が風景やら、風景が自己やら、言語道斷、心行所滅。一句の成るものすら無かつた。句の彼方の恍惚裡に、溶融してしまつたのだ。物の極みの一圓相の、其の圓の中心に遊び了したのだ。彩色を絶した白色の、其の白の世界に投入してしまつたのだ。

暮色に包まれた、大高森のあたりから、先づ蒼茫として來た灣内は、暫らく黄昏の微明の裡に瞬いて居たが、やがて仄ぼんのりと海上に明るみが加はつて來て、月が登つた。眺めは晝と自ら一變した。月光に淨化された風景は、明暗幽渺な一幅の大きな夢現畫となつて、別世界のやうに出現した。

晝から夜に亘つて、自然の大いなる藝術に心を奪はれた芭蕉は、夢遊病者のやうな心理になつて、月光の中を船に揺られながら、旅宿に歸つて來た。

居室に宛てられた表二階の障子を明け放して、尙ほ飽かずに、初夏の月影を眺めて居ると、全く風雲の裡に旅寢して居るやうな、不思議な幻想に持つて行かれ、怪しいまでに心境は冴えた。

供の曾良は頻りに呻吟して、松島に一句を作つたが、芭蕉は黙々として、思念を敢へてしなかつた。けれども心境は益々冴えて、眠らうとして寢床に就ても、更に眠れない。眠れないのに任せて、江戸の草庵を出る時に、素堂の贈つて呉れた松島の詩や、安適の松島の和歌や、杉風の松島の俳句などを、旅囊から取出して、終夜の友として過した。

東北隨一の禪利として有名な、松島の瑞巖寺も見た。腰衣の小僧が、面白い説明をして呉れた。『此のお寺は清和天皇の御時に、天台宗の慈眼大師が創立されましたものでございます。其の後鎌倉時代になりましてから、北條時頼公が禪宗にお改めになりました、折から入宋して佛道の奥儀を究めて歸朝なされた、前身は豪傑眞壁四郎の法身和尚が、住職になられました寺でございます。降つて伊達政宗公の時代になりましたから、公の招聘によつてお出でになつた、雲居禪師の徳化によつて面目を一新しました大伽藍でございます。』

雲居禪師に就きましては、有難いお話が残つて居ります。禪師が毎夜お一人で、此の先の坐禪岩へお出かけになつて、坐禪をなされて、深更に及んでお歸りになる

のが例であつたと申します。ところがそのことを知つた悪戯好きの近所の若者達が豫々天狗の出るといふ噂のある、途中の天狗岩の松の木に這ひ上つて、禪師が夜更けに其の下をお通りになるのを、闇に紛れて待ち伏せて居たのでございます。禪師はそんなことは一向御存じありませんから、いつもの通り坐禪を濟まされて、暗い岩の間の小逕こみちを通つて來られました。

待ち構へて居りました若者は、時分はよしと、眞下をお通りになる禪師のお頭をむづと手で抑へつけました。すると禪師は、其の抑へられたまゝに、黙つてお立ち止りになりました。幾ら経つても身動きもなさりませんので、若者は張合が抜けて頭を抑へた手を放しました。と、禪師は矢張り黙つたまゝ、元通りまたのこゝと歩き出されたさうでございます。

翌る朝になつて、其の若者は何食はぬ顔をして、禪師の許をお訪ねしまして、「和尚様が昨夜天狗岩で、天狗にお出會ひなされたとかいふ噂ですが、それは本當でこ

ざいますか』と聞きました。すると禪師は、あたり前のお顔で『出會つたことは出會つたが、あれは天狗ではない、掌てのひらが大層肥料臭こえかつた』と申されましたので、若者は丸くなつて逃げ出したといふことでございます——』。

平泉へ——。芭蕉主従は更に奥を北に指した。途中には『あねはの松』だの『緒絶えの橋』など、いふ處があつた。總じて道は幽かに草木は深く、時々兎が走つたり雉子が飛んだりした。幾里歩いて、容易に人には逢はず、朝から夕まで歩き續けても、なか／＼一村落にすら出られなかつた。

北へ來たのならば、海の見える筈が無いのに、海がまた見え出した。港らしい光景で、諸國からの廻船が、幾百となく帆檣を林立させて居る。砂濱には無数の人家が軒を並べて、煙が賑はしく晴れた空に昇騰して居る。平泉へ行くべきを、何時の間にか方角を間違へて、石巻港へ出てしまつたのであることが知れた。

海上を見渡すと、沖の彼方に金華山が見える。日本で初めて黄金を産出したとい

ふ其の寶の山が、午後の日^に照されて、波濤の間に煙つて居る。豫定が違つて、思ひがけぬ處へ來てしまつたが、元より日限のある旅ではなし、却つて期待せぬ景物に預つたやうな心持もした。

道に踏み迷つて、思はぬ港に一泊をした芭蕉主従は、翌る日もまた覺束ない道を歩かなければならなかつた。萬葉集に出て居る『まゝの萱原』など、いふ處も通つた。山際の長い林道なども過ぎた。白衣の尼僧を思はせるやうな、寂しく静かな湖畔^を行き盡して、其處の村落にまた一夜を明した。大層迂回したので、平泉へは其の翌日遅く着いた。石の巻からの道程は、二十里もあつたやうに思はれた。

六十四

江刺郡えさしごほりから移つて、城砦じやうせいを構へた藤原清衡以來、基衡、秀衡、泰衡と、四代九十年に亘つて、勢威を振つた要地が、此の平泉であつた。元を尋ねると、藤原氏の先祖は所謂夷狄しやうていの出なのであるが、清衡の時代になつて、朝廷から陸奥出羽の押領使に任ぜられ、それからまた秀衡の代になつては、更に鎮守府將軍に任ぜられたので、勢望は益々四方に隆がり、日本の邊土に別天地の王國が在るといふやうな、觀を呈するに至つたのだ。

因習久しく褻禮じやくれいに狎れ、文弱に耽溺して、たゞ長袖能く舞ふことにのみ生きて來た左大臣兼實が、『奥州夷狄おくしゅういてい秀衡鎮守府將軍に任ず。亂世の基なり』と、先見振つて嘆息をしたのは此の時のことであつた。秀衡が更に陸奥守に任ぜられた時には、兼實がまた『天下の耻何事か是に何かんや』と勿體らしく嘆いて、秀衡を侮り、同時に暗に勅命を輕んじたのだ。けれども秀衡の貫目は、兼實などは段違ひの人物であつたのだ。智情意の能く完備した、立派な紳士であつたのだ。人を斬ることも知つ

て居れば、人の爲に涙を注ぐことも亦知つて居る、理想の將軍であつたのだ。

兄に狙はれて、纔かに身を以て遁れ來た、失意の九郎義經に切りに頼られ、肯うなづいて胸に呑み込んだが最後、一諾金鐵のやうに固く、當時征二大將軍として將たまた十六國の總追捕使として、關東の威令を天下に山の如く重からしめて居た、剛愎峻嚴な頼朝を彼方に廻はして、泰然と牽制して居たのだ。歸つて、京都の公卿達はどうかといふに、頼朝の威風に怖れ、曩に秀衡を二狄と嘲つたほどの虚勢も失せて、唯是れ鎌倉の鼻息を窺ふに日も足りぬ有様になつたのであつた。——芭蕉の心中には、當年の史籍が現前した。

平泉に入る一里ばかり手前に、昔あつた城砦の、大門の跡が残つて居た。館の跡は更に奥に入つた處に在つた。秀衡の本城の跡の高館に登つて、四方の風物を見渡した。北から流れ來る北上の長江は、奔放な河相を呈して、眞晝日の太陽の下に『永遠』を語つて居る。和泉城の裾を回つて左方から流れ來た衣川は、恰度芭蕉等が、

草鞋の儘で佇んで居る、高館の下へ來て、北上川に合流して、河幅は廣まり、水深は濃緑を増して居る。

泰衡の據つて居た舊城は、衣ヶ關を隔て、確實に南部口を扼し、若し蝦二の諸群團が、異圖を企み、反旗を翻して、襲ひ來るやうなことがあつても、一度び此處を守れば、斷じて一指をも染めさせぬといふやうな、要害な地勢を占めて居た。

斯うして天然の濠渠をなす、大河の奔流を控へ、天然の關門を擁し、天然の山丘を城廓として、精兵を養ひ、悍馬を飼つて、父より子へ、子より孫へと繼承して、獨立不拔の一敵國を形成し、流石の鎌倉幕府にすら、敢へて來り觸れるを避けしめたのだ。

併し此の藤氏一族の威武も豪華も、一場の夢のやうに、時代の波浪に押流されてしまひ、瓦散り、礎石埋まり、見渡したところ、極めて落莫とした景觀を呈して、のゝ天日と、蒼穹と、山河とのみが、今古依然として、無言に何かを遊子の前に語

つて居るだけだ。

俯向いた儘でゐたり、振返つて遠近を望んだりして居た芭蕉は、ゆくりなくも『春望』の詩の、杜少陵の心持と邂逅した。

——安祿山に叛かれた時、唐の天子の玄宗は、今まで愛人楊貴妃と共に、花月の間に陶酔から陶酔を續けて居た、歡樂の都の長安を支へ得ずに、西の方蜀へと險路と蒙塵したのであつた。矢張り難を避けて杜少陵も都を去つた。そして時日を経て、騷亂の漸く静まつた後、嘗て住み馴れた長安に杜甫は再び歸つて見た。併し以前の面影は、毫しも止めて居なかつた。朱碧の高樓か聳え、民家が櫛比し、街上に車馬絡繹として、黽賑の極を盡して居た都府が、兵焚のために燼滅して、まるで洪水に押流された跡のやうに、荒涼として無人の境に化つて居たといふことだ。彼の詩によると『國破れて山河在り』とあるから、山河以外又他に、何物をも跡を止めなかつたことであらう。『城春にして草木深し』とあるから、人の影すら見えなかつたこ

とであらう——芭蕉は斯う思ひながら、現在目睹して居る、平泉の舊跡に當年の事を懐ひ合せた。夏の太陽の赫灼とした光線は、地の中にまで透滲するほど深烈に射して居る。一場の淡い夢と果てた功名の跡には、武夫共の幽かな魂が揺れるかのやうに、草いされの陽炎が氣配つて居る。止たつ蜻蛉は、だるさうに羽を下げ、腹を動かして呼吸してゐる。悠久な天地の姿から見れば、人の世の事は榮枯と謂ひ、盛衰と謂ひ、全く彼も一時是も一時だと芭蕉は思ひながら、一塊の土にも尙歴史の色の濃厚に滲んで居る處へ、笠を敷いて腰を下して、長時間たゞ黙り込んで居た。

夏草やつはもの共が夢の跡

詩が燃えた。無常流轉を弔ふ魂に詩が燃えた。

中尊寺へ来た。山門に入る左右の土手には、松の老樹が並木をなして、境内の森閑を象徴して居た。藤氏全盛時代の中尊寺は、實に規模が雄大であつたといふことだ。白河の關から、外ヶ濱に至る間の、二十餘日もかゝる行程の一丁毎に、金色の阿彌陀像の印してある笠卒塔婆を立て、寺域の中心になつて居る、此地の山頂には、其の代表的の大墓塔を立て、それから境内の中央には多寶塔を建立して、左右に釋迦と多寶との二像を安置し、其の中間に關路を設けて、一般行旅の街道としてあつたといふことだ。

境内には、各種の堂宇が金碧の壯觀を盡し、殊に高さ五十尺の二階大堂には、本尊として、金色に輝く三丈の阿彌陀佛が、瑞嚴の法界を示現して居たさうだ。また金色堂の阿彌陀三尊と、二天六地藏とは、名佛子定朝じやうちやうの傑作であるといふことだ。今は僅かに本堂、全色堂、經藏、辨慶堂などの少數が滅び残つて居るのみだが、幾十の堂宇、幾百の佛像が境内を埋めて、佛教の黄金國現世の淨土を形成して居た當年

の壯麗な光景が、まざざとと眼前に想像された。

南部の方を遙かに望みながら、芭蕉主従は岩手に入つた。此の邊は昔義經が、北陸から陸前に落ち延びる時に通つた道だと謂はれて居る。鳴子の湯から、尿前しんまへの關に差しかゝつたところが、平素は殆んど旅人の影を見ない程の、極めて僻地なものだから、關守の役人は、彼等の一種異様な風體を、怪しく見て咎めた。

いろ／＼辯解して、漸く關所を通して貰つた。大山といふのに登る手前で日が暮れた。漸く人家を見つけて、一夜の宿を乞うた。それは國境を守る役人の住居であつた。宿屋稼業はしないのだが、行脚を續けつゝある、芭蕉主従を能く諒解して、快く泊めて呉れた。

翌日の未明頃から、ひどい暴風雨になつて、出發することが出来なくなつた。終日吹降りして、戸も開かれぬくらゐであつた。夕方になつて風だけは漸く止んだが雨は尙降り續いて、とう／＼三日の間、其の家に閉ぢ込められた。

狭い家の中は、煤けて埃ぼくて汚ないばかりか、人の寝起きする場所と、僅か一間ばかりの土間を隔て、同じ棟の内に馬屋が設けてあるので、尙更むさぐるしい。馬が脚の踏み場を變へる毎に、下に敷かれた、糞尿に濕つた藁が、蒸々した異臭をあげる。甘酸っぱいやうな飼葉の臭氣もする。横たへられた丸太の間から、折々馬が長い顔を出して、首をふるはしたりする。馬にとまつて居た蠅は、慌てゝ人の方へ飛んで移る。外は雨なので、碌々戸も明けずにあるために、其の鬱陶しさといつたらない。けれども芭蕉にとつては、それは只淡い佗しさであつて、決して深い苦しみではなかつた。其の薄暗い濕々した空氣に、けあとされて居るのではなくて、邂逅した其の境遇に隨縁して、*アエト*とした心思で、すべてを眺めて居るのであつた。囑目悉く俳諧の彼には、斯うして旅の宿のいぶせきもの、裡にも、自己の内部の印象と、外部の光景との融化を見ずには居なかつた。

六十六

降り續いた雨が、漸く前夜のうちに止んで、空が淺葱色に晴れて、爽々しい嵐氣の、山峽に涼しく流れる朝が來た。芭蕉主従は、四日目で其の家を立つことになつた。主人は言つた。

「これから、此の大山を彼方に越えまして、出羽の國に出ますまでには、途中に暗い森の續いたところがあり、底の知れないやうな豁谷があり、なか／＼困難だと聞いて居ります。」

「併し道の形ぐらゐはついて居ませうな。」

「道らしい道も無いさうです。土地の者すら、なか／＼容易ならぬ難儀の山越えと

してあります。馴れぬ方には覺束なく思はれます。」

「誰ぞ適當の案内人でも、雇はれぬものでせうか。」

芭蕉は、先に松島から平泉へと行く途中、道を間違へて、思ひがけぬ石の巻の方に出た失敗もあるので、尋ねて見た。

「心當りの者に頼んで見ませう。」

主人は附近の農家へ出かけて行つたが、やがて屈強な若者を連れて來た。いかにも頼もしげな案内人だ。甲斐々々しい旅装をして、腰には山刀を差し、手には太い櫂の杖を握つて、たゞ途中で山賊に出會つても、驚くものかといふ精悍な様子をして居る。若者は先頭に立つた。

宿の主人の口吻から推測しても、今日といふ今日こそ、危い目、辛い目に遭遇するのではあるまいかといふやうな、言ひ知れぬ一種の不安を豫測せずには居られなかつた。

主人の言ふことに嘘はなかつた。二里、三里と、だんく奥に入るに従つて、山は高くなるばかり、森は深くなるばかり、谷は幽かた、木の下の細い道は暗く繁つて、山蛭でも襟首の邊に落ちて來さうだ。鳥すら居ないのか、鳴聲も聞えない。

「此邊が一番物騒な處です。山賊の仲間が、遙か彼方の大木の上に登つて、此方の高い木の上に登つて居る相棒と、相圖をし合つて、旅人をやり過して置いて、前後から襲ひかゝつたといふ話もあります。」

案内の若者は、こんな話をして、警戒するやうな身構へをしながら、前後左右を見窮めたりした。

人の背よりも高い熊笹を潜つたり、水苔で滑りさうな谷川を渡つたり、岩鼻に獅噛みついたりして、全身に冷たい汗を流し、苦しい呼吸を呑みながら、一步々と歩き續けた。斯うなると流石の芭蕉も、今迄怪しさを味つて居た、ゆこりのある心持に、多少の搖ぎの來ぬ譯には行かなかつたが、併し、森羅萬象の中に自己を投入

して眞の詩境に澄んだ體得を欣求する、持ち來つた一念によつて、その搖ぎかけた心持を、直ちにまた元の餘裕のある處へ、易々と取戻すことが出來た。

漸く最上の庄に出ることが出來た。一行は互に見合つて、ほつとした面持をした。「此の道中には、何かしら、災難が付き纏ひがちなのですが、今日は幸ひに何の恙も無く、お客様方を御案内申すことが出來て、私までが仕合です。」

若者は、別れて歸る時に斯う言つて、ひとごとでないやうな喜色を顔に浮べた。芭蕉主従も、虎口を遁れたやうな心持がした。

六十七

尾花澤には清風が居るので、行つて訪ねた。彼は土地での名門であるのみかなか、くくの財産家、だが少しも銅臭を帯びず、風流の眞を解した男で、度々江戸にも出たりして、旅の心の佗しさも充分知つて居る人だ。

「思ひがけぬ喜びです。先づ何よりも、永く御逗留の程を、豫めお願して置きます。」と言つて、遠來の芭蕉主従を勞つた。

隨所に主となるの自由を、常に心に持つて居る芭蕉は、一家の人々が心から盡して呉れる深切に、一層暢々として、自分の草庵に居ると同じな、寛いだ心持で世話になることが出來た。

家には養蠶の一室があつて、竹竿を幾階にも渡した棚の上の、數多の圓い藁座の中には、刻んで散した青い桑の葉の間に、無数の蠶が白い體をムクムクと動かしながら、微かに細雨のやうな音を立て、桑を食つて居た。

蠶飼に従事するのは、身邊の清潔を保たなければならぬので、近所から手傳

ひに來て居る娘達なども、皆洗ひ髪のまゝ束ね放しにして、油氣も無くして居る。衣服もたゞ瀟洒として、少しも飾つた色彩が無い。けれどもそれが、いかにも古代の風俗其儘に見えて、却つて床しい情趣を覺えた。

主人の清風は、夙くから江戸に往來して、檀林風の俳諧を學んだりして居たのであつた。そして自分で、諸國の俳人の作を、句集に編んだりしたこともあるのだ。其の當時は、まだ芭蕉の本當の詩風の、發揮されずに居た頃なものだから、大して重くも見ずに、句集の中にも僅かに一句を採つただけで、自ら先輩の如く高く持して居たのであつたが、其後漸然芭蕉の雄偉な詩想が現はれて來て、遂に前人未到の新らしく鮮かな正風の一體を、確實に建設して、天下の俳壇を風靡した、其の高く秀でた力量を見て、雅懷のある彼は、曩の日の態度を變へて、芭蕉に只管推服して師事するやうになつて居たのだ。

そこへ思ひがけなくも、彼の來訪を受けたので、これ幸ひと、種々の俳談を持ち

かけて、何呉れとなく、其の意見を叩くのであつた。芭蕉は元より高振りはしない。けれどもまた敢へて卑下もしない。問はれるまゝに、自分の思ふところは腹藏無く述べた。

「他門の方々の句は、例へば彩色した畫のやうにも思はれますが、私共の句は、水墨畫のやうであるやうにと、常に心がけて居ります。尤も折に觸れ、時によつては全く彩色を施さぬと限つた譯でもありません。」

などと言つた。また

「物象を直觀しましたならば、其の直觀の刹那の、光の未だ消え去らぬうちに、言ひ取ることが大切に思ひます。」

などと言つた。

留められるまゝに、幾日も滞在した。雨模様の夕方などは、蠶室の縁先の庭に何處からか、大きな墓がノコノコと出て來て、兩腕を張つて、悠然と這ひつくばつて

「俺を何と思ふ」とでも言ひさうな様子をして、黒い斑点のある淡黄色の喉の邊をグビリ／＼と動かして居ることがあつた。

垣根の邊には、眉刷毛の形に似た紅粉の花が、美しく澤山に咲いて居た。朝早く起きて見ると、露に濡れた青葉が、涼しい微風に軽く揺いで、庭の外から直ちに續く野や丘には、薄く白い霧が、羅物の幕を張つたやうに流れて居た。素足で歩いて見たなら、冷々して嘸ぞ心地よからうと思はれるほど、庭は一面にしつとりと濡れて居る。

六十八

尾花澤からは、最上川を舟で下つて、羽黒山の方へ行く豫定であつたが

「山形領内に、立石寺といふ、此上も無く寂しい山寺があります。折角此地までお出でになつたのですから、方向は違ひましても、是非お尋ねになつて御覽下さい。」と勧められたので、元より旅を歩き旅に瘦せ、詩を思ひ詩に瘦せることを、持つて生れた命として居る芭蕉は、坐ろ遊心に動かされて、西に行くべき脚を、取つて返して南の方に向けた。其の間の道程は七里ほどあつた。

朝早く立つた上に、永い夏の日なものだから、山麓まで行つた時には、まだ日没までには可なり間があつた。で、其處に在る宿に泊めて貰ふことにして直いて、堂宇の建つて居る山上へ登つて行つた。途中には、渦を巻いて流れる、氣味の悪い淵もあつた。山は大きな岩々の堆積によつて、構成されて居た。伐れば祟でもありさうな、物古い松や杉が、其處此處に夥しく生ひ繁つて、苔は青い蓆を敷いたやうに、冷たく山膚を蔽うて居る。岩の蔭や木立の奥にある院々の扉は、寂しく閉され

たまゝで、四邊に物音といふものが更に無い。たゞ夕陽の横射する森林の中に、蟬の聲だけが僅かに聞える。冷たく露の汗をかいた岩角を這ひながら、漸く奥の院まで行つた。

虚弱な身體をも厭はずに、ひたぶるに自然を慕うて、斜な夕日の中を此處まで来た彼の精進は、此の幽境に立ち盡して、さやかに眼を開いた。自然と自己とが、全く一如の妙境に融合した。無心に鳴く蟬の聲も、最早たゞの、昆蟲の薄膜の震動ではなかつた。刹那の風光を透して、無窮の實相裡に三昧した。彼の謂ふところの『天地の間に一物あり、俳と謂ふ』の底にまで直參した。

閑けさや岩にしみ入る蟬の聲

最上川を下らうとして、折悪しく雨風に會つたので、其の沿岸の大石田といふ一村落に滞留して、好晴の日を待つことにした。此地に、一榮といふ俳諧の熱心家がゐて、否應なしに、芭蕉主従を自分の家に連れて行つて、泊めて呉れた。二日滞在し

た。

「蔭ながらどれほどお慕ひ申して居ましたか知れませんが。遙々江戸にお訪ね申したく思ひましたことも、一再ではございませんが、何分にも此の片田舎に住みまして、其の意を果し得ずに居りました。柄にも無く、私も若い時から俳諧に志しましたが眞の俳諧は何處にありますのか、他様の御作を見れば見るほど、また自分で句作をすればするほど、いよゝく迷ふばかりでありましたが、先生が一度び、俳壇に正風を建てられましたからは、漸く歸趨が明らかになりました、迷子が家に戻ることに出来たやうな感じがいたしました。

さうしてそれに心を潜めては來ましたが、遺憾ながら直接お示しに預ることも出来ず、御高風に心酔しながらも、一向に埒があかずに居りました。何卒此の機會を幸ひに、先生の俳諧の骨髓を窺ひ得られますやう、後々までの手本ともなります一巻を、お恵み下さいませぬならば、此上の仕合はございません。」

と熱心をこめて、一榮は彼に嘆願するのであつた。

芭蕉は、自分が檀林風の俳諧に嫌厭らずに、独自の新詩風を開いて、其の確立してから、未だ十年とも経ないうちに、斯うした邊陲の土地にまで知られたのみか、而も信者が其の宗教を渴仰するほどの熱心さを以て、自分に俟つ人の在るのを見て非常に心強く、言ひ知れぬ喜に胸は満された。

「格に入つたまゝで、格を再び出ることを忘れると、詩眼は狭くなる。併しながら初めから格に入ることとを避けると、兎角邪詠に走る悞がある。要するに、一度格を守つて是に入り、さうして後ち格を出て、初めて自在なるを得る。」

席上に多人數が集まつて、作句の勝負を戦はずといふやうなことは、地方では殊に流行するものであるが、斯ういふことを、しばしば試みると、徒らに技巧にばかり長じて、俳諧の眞精神から、おのづと遠かり、知らず識らずのうちに、墮落することになる。であるから、斯ういふ遊戯は、努めて避けた方がよい。勝つたところ

で、一向に矜にならない。また負けても下手といふ譯のものではない。要は句と身と一枚になつて、其の渾沌裡に安んずるにある。」

芭蕉は、一榮に請はれるまゝに、斯ういふ風のことから書き起して、参考にならうと思ふことを、心に浮ぶまゝに記して彼に與へた。さうして話して見れば見るほど、自分の所思とよく共感する、眞摯な俳人を、江戸を遠く離れた此の草深い山村に、圖らずも得て、瓦礫の中に玉を拾つたやうな嬉しさが湧いて、恐らく今度の旅行中での、最も風流の交渉のやうに思はれた。

日本での、三大急流の一と稱せられる最上川は、此の出羽の國に於ての、また最も大きな河川であつた。水源を遠く陸奥の吾妻山に發して、山形の國の一角を上流にし、出羽に入つてからは、羽黒川や和田川、或は鬼面川、白川の諸川を併合して、北へ北へと流れ、更に須川、寒河江川を合せて、此の大石田附近に來ては、丹生川を我が物にし、新庄近くに行つては、また更に鮭川をも一つに呑み、遙かに庄内の平原を汪洋として横斷して、遂に酒田の海港に朝するのだ。

川の延長數百里、流域の全面積四百八十方里と稱されて居る。それが折柄梅雨上りのことゝして、水嵩は恐ろしく増して、錆色を呈した濁水が、沿岸の草木を根こぎにしさうに洗ひながら、凄まじい河相を呈して、奔放大膽に滔々として流れて居る。

舟の出る丘阜に立つて、暫く流水の面に見入つて居ると、水の奔流は其儘止まつて、却つて大地の方が移動しつゝ、自分達を乗せたまゝ、ずん／＼と走り廻つて行くやうな錯覺をさへ起させる。

舟は長江を下つて行つた。長い／＼さうして廣々とした水面に比べると、乗つて居る舟はいかにも小さく、宛ら玩具のやうで、頼り無い心持がする。途中には『ごてん』だの、『はやぶさ』など、いふ難所があつた。

難所と謂はれるやうなところは、大概是、今迄眞直ぐに流れて來た水が、突如として彼方の岸壁にぶつかつて、右折するか左折するか其の機會に、鬣を振亂して怒り狂ふ悍馬のやうに、水勢を躍らせ、飛沫を高く上げると同時に、底は深く岸壁の奥に喰ひ入つて、怪しく青く渦を卷いて居るやうな場所であつた。

一本の竹竿を巧妙に繰りながら、舟を水に托するものゝ如くにして、而も難所々々に差しかゝると、間、髪をいれずに、手のうち鮮かに是を避けて、下り下つて行く船頭も、馴れては居るものゝ、一つ間違へれば、生命に拘はることだけに、さすがに側目もふれず、物も言はずに、顔面の筋脈は緊張して、其處にたゞ眞剣な、一種言ひ知れぬ悲壯さが漲つて居る。曾良は顔色を變へて、舟縁をしつかりと兩手で

掴みながら、芭蕉の顔を見詰めて居る。

「怖こはさうだな。」

「胸がどき／＼します。」

「私も怖こはい。」

「江戸を出ます時に、一切をお任せし切つた身體でございませうが、斯うなつて見ますと、足が地面について居ませぬだけに、危あやしい氣がしてなりません。」

「無理もない。此の舟板の一枚下は地獄も同様だ。併し山や水はさう／＼人を殺すものではない。若しものがあつても諸共だ。まあ落ちついて、目に入り、心に入つて来る風物を、よく見詰めて確と取入れて置くことだ。」

「御一緒ですから、心強うございます。」

兩岸の丘陵は、山の形が圓みを帯びるほど、一樣に草木が生ひ繁つて居る。舟は其の緑色の堆積の間を、川浪に揉まれながら、走つて行くのだ。

斑らに日光の明暗する青葉の樹間に、白糸の瀧といふのが、涼しく隠見して、其處の岸に、仙人掌といふのが、水に枕して涼しく建つて居た。下るに従つて河幅は廣く、水量は増して、舟を木の葉のやうに浮べ流す。

五月雨をあつめて早し最上川

七十

途中で舟を捨て、羽黒山に登つた。山はさまで高くはないが、樹木に富み、清浄な空氣が流れて、いかにも靈山の趣を備へて居た。此處には露丸といふ門人が居るので、其の紹介で、別當代べつたうだいの會覺くわいかく阿闍梨あせりといふ、首座の僧侶に面謁した。阿闍梨

は物静かな、打寛いだ性質の人で、多少風流も解して居るらしく、旅に行く詩人の心持といふやうなものも知つて居る風で、芭蕉主従を、わざわざ南谷の別院の、閑寂な一室に招じ入れて、あつさりとした言葉のうちに、而も十分心を盡した待遇をして呉れた。

権現の社に参詣した。開基の能除大師といふのは、いつの時代の人か詳しく知れないが、醍醐天皇の延喜式に、それらしい記録のあるところから察しても、千年以上も古くから、此の社殿のあつたことが知れた。心なしのせいか、仰いで見る月の影にも、天台宗の奥儀の象徴ともいふべき『仕観』の、礙りの無い密意が偲ばれ、殿堂の中に瞬いて居る法燈の搖ぎにも、深く圓らかな佛意が窺はれて、尊嵩の念慮が自づと湧いて來るのであつた。

更に、羽黒山の奥の院になつて居る月山の方へ向つた。強力に案内されて、奥へ奥へと登つて行つたところが、平地は現に夏の景色になりきつて居るのに、此の邊

の山道には、密林のために終日太陽の光を遮られた處々に、まだ寒く氷雪の残つて居るのを見た。

雲や霧の白く流れる中を、凡そ八里ほども行つた頃は、呼吸は苦しくなり、脚はひどく疲れて、此の先更に登つて行つたならば、雲門を潜つて、天外に出るのはあるまいかといふやうな感じさへした。

非常な努力を續けて、漸く頂上に登ることの出來た時には、日が既に西に沈んで間も無く東の空に、月が代つて現はれた。笹の葉を敷き、笹の束を枕にするといふ按排で、其の夜は全くの野宿で過すことにした。

月は高く登るにつれて、光輝をおひ／＼に鮮かにした。露は草の葉をしつとりと濡して、四邊はまるで墓場のやうな沈黙の裡に入つて行つた。時々夜深い夏雲が月を呑んで、下界を薄墨色にぼかすが、また何時の間にか雲は流れ去つて、空は水のやうな青さに歸り、冷涼の月光が、再び地上に遍照する。夜氣は肌膚に滲透して、

夏ながら身慄ひするほどに寒い。

雲の峯いくつくづれて月の山

人類に静思を促すために建てられた、森嚴な一大伽藍とも思はれる、靈山の頂上の夜は、爽かな薄紫のうちに明けはなれた。朝日が眩しく昇るにつれて、曉の靄はだん／＼に消え、あたりの視野がはつきりとして來た。

湯殿山の方へと下つて行つた。途中の谷の坊といふ峽谷に、鍛冶小屋と稱する處があつた。此處は昔名工の月山ぐわつさんが、心身を潔齋して、靈地の清淨無垢な水を汲んで光芒寒く精影地鐵に現はれる名劍を鍛へた處と謂はれて居る。

岩角に腰を下して、ゆつくりと休憩しながら、フト傍を見ると、小さな山櫻の木が、なかば残雪に埋もれたまゝ、薄紅い蕾を僅かに開きかけて居るのであつた。東北地方の此の深山の寒さに封じ込められながらも、矢張り陽氣が來れば春を忘れぬ『遅櫻の心』といふやうなことが考へられて、優しい可憐さを覺えた。

芭蕉主従は再び舟に乗つて、更に最上川を下つた。ぢり／＼と照りつける、眞夏の太陽の光線が、眩しいまでに河の面に反射して、折々飛沫で衣服を濡すことがあつても、直ぐに乾いてしまふ、水の上を舟行して居ながら、其の暑いことは一ト通りでなし。

豊富な水量を傾けて、五里、十里とずん／＼流れて來た最上川が、いよ／＼海に落ち込むことになつた。酒田の港へ着いたのだ。芭蕉が此地へ來たのは象潟の風景を見たいためであつた。

酒田の港から、東北に向つて、山を越え、磯を傳ひ、白砂を踏んで行く其の間が凡そ十里もあらうと思はれた。沙丘の立つて、眼の前に展げた象潟の風景を珍らしい心持で眺めて居るうちに、夕陽が、日中の暑い光輝から、やがて夜にならうとする前の、涼しい色合に變化しながら、おひ／＼沈みかけた。

空の模様が急に曇色を帯びて、汐風が吹き起り、濱の砂を煙のやうに飛ばし初めた。と續いて雨を催して、遙かに見える雄大秀麗な鳥海山は、墨繪のやうに仄されてしまつた。暗い景色のうちに、間も無く日が暮れた。

其の夜芭蕉主従は、すく／＼と繁つた青柳の間にある、蟹の蘆屋に泊めて貰つて蓬の窓に夜の雨を聴きながら、短かい一夜を水鳥のやうに明した。

翌朝は空が青く晴れて、今しがた昇つたばかりの、夏ながら未だ熱氣を放射せぬ旭日が、金色にサラ／＼と朝汐の上を走つて居る。苦の周囲の芦の青葉は、洗つたやうに露に濡れて、さや／＼と風に揺いで居る。

舟をやとつて、海の上を行つた。朝の汐風が涼しく吹き渡つて、おのづと息を深く吸ふ。吸つた息は氣管を通じて、細胞の一つ／＼を新鮮にするやうな、蘇つた爽かな快感を覚えしめる。元來蒲柳の質の芭蕉は、旅の上に恵まれた、自分の天命の有難さを、何者にともなく感謝するやうな心持になつた。

能因島といふのに舟を寄せて、岸から上つたところが、『——花の上漕ぐ蟹のつり舟』と西行の詠んだ櫻の老木が、今尙其處に残つて居た。千満珠寺といふの、方丈に上げて貰つて、軒端の簾を捲いて眺めると、四邊の風物が双眸の裡に收められた。西方は、むや／＼の關によつて劃られ、東方は築堤の彼方、一路遙かに秋田の國に通ひ、北に構へた入江の中は、凡そ一里四方もあらう。見渡したところ、風景の大體は松島に稍似て居るが、併し明るい感じのする松島に比べると、此處は日本海に面して居るせいか、寂しさの中に一味の悲調を含ませたやうな、一種陰鬱な情景が漾つて居て、何となく、旅人にして初めて知る、旅の愁を咬るやうな、或る特殊

の趣があつた。

是からは毎日、西を指して北陸道に向ふのだ。景色は全く一變して、北國の気分が著しく色づけられて來た。加賀までは、前途百三十里ほどあるといふことであつた。元より『旅』に終始しようとする芭蕉ではあるが、行く先々の、まだ見ぬ國々を想像すると、思は遙々として、楽しいうちにも、何となく傷ましめられるもののあるやうな心持がした。

七十二

鼠の關を越えて、越後路に入つた。海に近い砂の多い道は、殘暑の烈日に煎られ

て、草鞋を透して暑さを感じるほど、歩くのに困難であつた。折から持病の痔疾がまた起つて、苦しいことは並大抵ではなかつた。

人にはそれと告げこそしないが、行く／＼、季は幽かながら秋に入つて、新潟から砂濱續きを、出雲崎の方へ出た頃は、また暑さは去らずながらに、天地の大氣は既に、秋の方に向つて澄みかけて居た。

近くには巨鯨のやうな浪頭を白く見せて、遠い沖の方には青い一線を引いた、海上十八里の彼方には、佐渡の島山が、紺青色の空の裾に横たはつて、峯々の巖や、谷々の隈までを、手にとるやうにはつきりと見せて居た。——遙々と都から、あの孤島に流されて來て、一生再び歸還することも赦されずに、朝になるにつけて、夜になるにつけて、寂しく汐風に咽びながら、瘦せ衰へた體軀を、濱邊の岩に投げかけて、泣くにも泣かれぬ悲しみを抱いて、遠く内地の空を眺め暮した、昔の罪を蒙つた人々の、流離の思などを察しながら、此の北國の一孤島を、芭蕉は海の彼方に

見渡した。

旅宿に草鞋の紐を解いて、草臥れた兩脚を延した時は、最う夕方になつてゐて、海上は蒼茫として、見る／＼暮色の中に包まれて行きつゝあつた。黄昏から夜の領域に入る暫の間、天地はちよつと晦暝の底に沈んだが、間もなく上空に無數の星影が現はれると同時に、眼界の限りが再び仄明るく浮んで來た。唸るやうな沙騒さぶの音が彼方に聞える。

たなはた七夕に近い夜であつた。仰ぎ見ると、冷涼として澄みかけた天半に、銀河が乳を流したやうに、白く高く冴え／＼と懸つて居る。芭蕉は、楽しく寂しい旅の心を、沁々と胸の奥に抱いて、客舎の窓に靜かに凭れながら、男性的な荒々しい感じのする、夜の日本海の眞上に横はつて居る、天の川の光景に、瞬きもせず眺め入つた。薄ら寒い北の海の夜の風に、衣服の襟を掻き合せながら、大海原の上の大空を、飽かずに眺めて居るうちに、心魂は何時とはなしに、現うつから幻まほろの境へと融け込んで

自己の生命と、自然の生命とが、一緒に抱擁し合つて、主客を絶した第三の境地に遊んで居るのであつた。

夜はだん／＼深くなつて行つた。蒼暝に煙る沖の彼方からは、心臓にまで響くやうな、微妙な海潮音が絶えず聞えて、無數の星影が銀梨地のやうにキラ／＼と瞬く青深い大空の半ばに、天の川は益々白く冴えて行つた。

芭蕉の心思は、最う既に自然の中樞に參じ了して、我無く他無く、宇宙其者と一體であつた。

荒海や佐渡に横たふ天の川

直江津に行つた。或る寺を訪ねて、貰つて来た知人の添書を出して、一夜の宿を頼んだ。出て来た小僧と話をして居る、芭蕉と曾良とが、揃ひも揃つて、垢染みた汚ない身装をして居るのを、住僧が物蔭から窺ひ見たらしい。一度奥に引込んだ小僧が、再び出て来て

「お氣の毒ですが、お宿はいたしかねます。」

と言つて斷つた。

「左様ですか、失禮しました。」

芭蕉は氣にも止めぬらしく、本堂に安置されてある佛前に一禮をして、其儘寺の境内から、外の方に出かけた。すると伴僧らしいのが、あとから追ひかけて来て

「俳諧の宗匠と承はります。何なりとお書き残し下さい。」

と請うた。

「お易い御用です。」

芭蕉は平氣で、腰の矢立を抜き取つて、其の坊主の言ふなりに書き出した。ところが曾良は、芭蕉の手を取つて、ぐいぐいと引立てた。

「場合にもよります。お止しなさいませ。秋の日短かく、最うそろそろ暮れかゝると申しますに、頼みにして来た此の寺では、宿を貸さぬといふではござりませんか。こんな無用の場所は、早くお立ちなさいませ。」

平素温良な曾良が、寺の仕打に餘程腹を立てたらしい。芭蕉は門前の石に腰をかかけながら、曾良を制した。

「怒るな。そんなことで行脚が出来るものではない。江戸を出立する初めの日から旅に出た上は、何處の木の下にも一夜を明し、因縁に任せて、歩く覺悟ではなかつたか。斯ういふ折こそ、佛陀の御心も拜まれ、娑婆のあはれも知ることが得、俳諧の大道にも入ることが出来るのだ。」

「左様でございませうが、情無く宿を貸さうともせず、而もお筆の跡を望むとは

何といふ得手勝手なことでございませう。」

「いや／＼さうは言へない。宿を貸さぬといふ主僧の心と、殊勝にも發句を望む伴僧の心とは、人が全く別なのだ。感情に走つて、坊主憎くければ袈裟までもといふことは、まことに宜しくなす。」

「恐れ入りました。さて今夜の宿をいかゞいたしませう。」

「此の山門の下を拜借しようではないか。此處に寝るのまでを咎めはします。」

二人は山門の隅の方に蹲つて、互に身を寄り添ひ、體温を交し合ふやうにして、一夜を明すことにした。それは恰度、七夕の前夜であつた。さう思ふせいか、空の風情も何時もとは異つて見えた。芭蕉は坐禪の僧のやうに寂然として居る。曾良は師の持病に障りはしまいかと、そればかりを心配して明した。翌日は高田に行つて知人を訪ねた。

越後、越中の國境をなして居る、市振いちぶりの關が、最う遠くは無かつた。其の手前に

「親不知」の難所が控へて居た。數十丈の高い斷崖絶壁が、一里も二里も續いて居る。其の高い峻しい、斷崖の斜面の急なのに比例して、海は岸から直ちに、ごかりと深く落ち込んで居る。其の最も危い區域が「親不知」の峻なのだ。屏風のやうな切岸が、深く海に喰ひ入つた、立てた刀の鏝元のやうな水陸の境目に、潮の出入の作用で、僅かに一線の危い通路が暫時現はれる。若し其の潮の呼吸をばづして通らうものなら、襲ひ來る物凄い怒濤に、忽ち一ト呑みにされてしまふのだ。

北國一の此の難所を通り抜けた時には、芭蕉も胸を撫でもろすやうな心持がした。

市振の關は寂しかつた。「親不知」から續いた、峻岨な連嶺を後に背負うて、細い川を挟んで、人家が三々五々散ばつて居た。海から吹き上げる風に、飛ばされぬためであらう。この家の屋根の上にも、丸い自然石が澤山に載せられてあつた。北國特有の空は曇りがちで、まだ咲かずに居る、白い木樨の花などまでが、地方色に蕭々とした風情を添へて居た。

旅宿も、實に佗しげな屋舎であつた。併し疲れ切つて居たゞけに、垢臭い濁つた風呂も、快く浴びることが出来た。粗末な膳の上の物も、旨く食ふことが出来た。やがて芭蕉は、曾良と並んで寢床に入つた。四邊は森として居る。荒い浪の音が枕元まで響いて来る。行燈の油は盡きるのか、だん／＼部屋の内が暗くなつて来る。曾良は最う寢込んだ様子だ。

隣室の客は、まだ寢ずに居たのか、沁々とした話聲が、襖を隔て、途切れ／＼に聞える。芭蕉は聞くとともになしに聞いて居た。若い女が二人に、老年の男が一人居る

らしい様子だ。

「此の手紙は、きつと彼のち方に届けて下さい。」

女の聲だ。

「承知した。忘れはしない。」

男の聲だ。

「夕霧さんにも、花扇さんにも、他の皆の衆にも、宜しく言つたと頼みます。」

他の女の聲だ。

「一生の別れといふではなし、何もそんなに哀れぼく言はなくともいい。」

また男の聲だ。

だん／＼様子を聞くと、其の女達は新潟の遊女で、それが心願があつて、遙々伊勢詣でをするのを、妓樓の男が、此の關まで見送りながら附いて來たらしい。翌朝は此の宿で別れて、故郷の方へ踵を返す男に、托してやらうとする、親兄弟や、思

ふ客筋への手紙を認めたり、跡に居残つた朋輩の遊女達への、果敢ない傳言などを頼んで居るのであることが分つた。

場所柄が場所柄だけに、夜更けて時が時だけに、また、馴れぬ旅路を繊弱い脚に行かうとする彼等が、遊女であるだけに、淡い哀情といふやうなものに取止めも無く誘はれながら、いつの間にか芭蕉は眠つてしまつた。

翌朝になつて、芭蕉主従が宿を立たうとしたところが、昨夜の遊女は二人の異様な旅姿を見て

「何れの御坊かは存じませぬが、お願ひがあります。私共はこれから伊勢まで參る者でございますが、碌々遠出もしたことの無い、歩きつけぬ女の脚に、行方も覺束ない馴れぬ旅。考へますと沁々心細くなります。決してお妨げになるやうなことはませぬから、どうぞ見えかくれになりど、お後に尾いてまゐることを、おゆるしなされて下さりませ。」

彼女達は、芭蕉主従を雲水の僧と思つたらしい。一人が斯う言ふと、他の一人も言葉を次いだ。

「衣の袖の御情に、佛の恵を垂れさせられて、どうぞ結縁けつえんのほどを御願ひ申します。」
 何處の誰とも知れぬ者を信じ切つて、真心をこめ、使ひ馴れぬ言葉を慎みながら目に涙さへ浮べて嘆願する、哀れな彼女達の様子を見ると、芭蕉は心中氣の毒に思へてならなかつた。併し同時に、飽くまで旅を生命として、山水の縁の儘に、心に隨うて行かうとする、自分の境涯を忘れることも出来なかつた。

「私達は是れから先、何處へどう行くか分らない身の上だ。山に寝ることもあらうし、同じ處に幾日となく逗留することもあらう。なまじひ同行を肯うた爲めに、あなた方が頼りに思つて、却つて迷惑になるやうなことがあつては、まことに本意でない。それよりも初めから二人だけで行く方がよい。決して取越苦勞をして、彼是思ひ頼らうことはない。神や佛が必ず守つて下さる。」

同情の無い人間だと、怨むかも知れないと思ひながら、強ひて斯う言ひ捨て、芭蕉は曾良を連れて、先に宿を出てしまつた。併し不憚に思ふ心持は、なか／＼去らなかつた。遊女達には、彼の心中が讀めなかつたかも知れないが『人』を思ふ同愛の情は、彼を遊女等と一體にして、白露のやうな涼しい詩境に導いた。昨夜寢て居ておぼろげに浮んだ句が、こゝに初めて、はつきりとして來た。

一つ家に遊女も寢たり萩と月

七十五

俱梨迦羅谷を通つた。雜木の密生した、傾斜の急峻な山々が、前後左右に立て連

つて、道側に落込んで居る谷はなか／＼に深く、僅かに空の一方が切れて見えるだけで、くりから谷の名に適はしい峻岨な山峽であつた。若しこれが特殊の地勢にでも在つたならば、慥かに關所の置かれる處であらうなど、思へた。

金澤に着いた。百萬石の城下だけに、落附いて都會らしく、殊に目に止まつたのは、町の屋並の、重々しくがつしりとして居ることであつた。大阪から來たといふ商人と一つ宿に泊り合せた。

金澤には芭蕉の門人が可なり多數に居た。彼等は、芭蕉の今度の長途の旅行を、前から聞知つて居て、いづれ當地にも立寄るに違ひないと、何れも心待ちに其の日の來るのを待つて居たことを語つて、大層歓迎して呉れた。

今日は甲の家、明日は乙の家へといふ風に、滞在中毎日々々、方々へご招待された。併しあまりに手厚い待遇をされるので、或る俳宴の催しの時などは、冷飯と煎茶だけの會合にしようと、芭蕉が態々申し出たほどであつた。

此の地方の多くの門下中でも、芭蕉は殊に北枝と一笑との二俳人に最も望を囑して居たのであつた。北枝は健在であつたが、一笑は不幸にも、去年の雪の降る寒い頃、まだ若い身空で病死してしまつたのであつた。芭蕉は此の機会にと思つて、親しく其の墓に参詣して、線香や草花を手向けて、哀悼の情の墳土に滲むほど、沁々とこれを弔つた。

句空の家に招かれて行つた時には、手入をせぬ、雑草の生ひ繁つた庭に、名も知れぬ虫が、既に秋らしく鳴いて居た。軒先に一本の柳があつた。まだ葉は落ちないが、最う生氣は失せて居る。たま／＼風が吹く。一葉二葉ひら／＼と散る。入相の鐘が、何處か其の邊の寺から、物靜かに流れて來た。對坐して居た芭蕉と句空とは言ひ合したやうに、黙つたまゝで顔を見交はした。

散る柳主も吾も鐘を聴く

芭蕉主従の、金澤を立つ日が來た。北枝は別離の情に堪へかねて、何處までとは

限らずに、見送つて行くと言ひ出した。町を出はづれて、小松といふ處まで行つた時、後から馬を飛ばして、追ひかけて來たものがあつた。それは金澤藩中で、重臣の一人に數へられる生駒萬子で、矢張り豫て芭蕉の詩風に私淑して居る、風雅の士であつた。

「御出立になられたことを、後から聞きまして、お名殘惜しさに、おくれ馳せながら、お慕ひ申してまゐりました」

鞭をくれて、餘程急いで來たと見えて、乗馬は、秋の朝の涼しい野風に、鼻腔をひろげて、忙しく呼吸をしながら、腹に波を打たせて居る。芭蕉は申譯を言つた。

「滞在中、大層御厄介をかけましたのに、また立際に御迷惑をお掛け申してはと思ひまして、態と其儘立つてまゐつたことでした。こゝまでお出で下されては、尙更痛み入つた次第です。」

「御餞別と申すほどのものではありません。ほんの寸志でございます。」

萬子は、衣類一着に金包を添へて出した。

「御芳情は重々忝く存じますが、衣服も汚損したとは申せ、御覽の通りまだどうにか纏ふに足ります。路用も多少残つて居ります。どうぞ御配慮はお納め下さい。」

「お言葉にかけられます程の物ではありません。ほんのおしるしでございます。」

「御厚意だけを有難く頂きます。實は旅中に物多いのを煩はしく思ふ我儘者。御無禮のところは、日頃の御懇ろに免じて、何卒おゆるし下さりませ。」

萬子も芭蕉の風格を豫て熟知して居るので、強ひては進めなかつた。そして清く親しく、心持のいゝ別れ方をした。

七十六

齋藤實盛が討死した後、其の遺した兜を、木曾義仲が家來の樋口兼光に命じて、奉納させたといふのが、太田神社に今尙寶物の一つとなつて居た。其の兜は目庇から吹き返しまで、菊と唐草模様との彫刻に、黄金が鏤めてあり、龍頭には鍔形が打つてあつて、一見して平武士ひらさむらいしの用ひたものでないことが解る。

老人であるがために、敵に憫みをかけられるやうなことがあるのを厭ひ、白髪を黒く染めて、若武者共の陣頭に立つて、彩配を揮つたといふ、古英雄の心事が、坐ろに悲壯に思へた。

平野、平田の間を辿り盡して、二天の宿しゆくを通り過ぎて、山懐の中に在る山中温泉に行つた。温泉宿は薬師山といふの、下に點在して、白鷺湯といふ大きな浴槽からは、白い湯氣が朦々と立つて、快い匂を四邊に放つて居た。

泊つた家の主人といふのは、桑之助と呼ぶ若者であつた。その話によると、亡父といふのは、非常に俳諧を好んで、且つなか／＼の達者であつた。ずつと以前の

ことだが、京都の安原貞室が、まだ若年で此地に來た時に、其の俳道の未熟さを見てやり込めた。貞室はそれに發憤して、京都に歸つてから、松永貞徳の門に入つて苦心に苦心を重ね、遂に世を知られる立派な俳人となつた。併し彼は、昔此の山中温泉で、發憤の動機を得たことを忘れずに、名を成してからも、此の一村の俳人達のためには、俳句の添削には應じて、花料は決して受けなかつたさうだ、といふ話などをして聞かせるのであつた。

湯の宿を出て、少しく奥に入ると、山は兩側からあひ／＼に迫る、杉や椎の木の繁みを透して、左方の崖下を見ると蟋蟀川が青い水を湛へて、岩を嘗めながら流れて居る。細いながらに、道のあるに任せて、更に奥の方へ行つた。道が山の根に突き當つて左折するところに、危く架け渡された橋があつた。

橋上に立つて、數十尺の下を見おろすと、岩壁と岩壁とが、兩岸から相寄つたところを、河は深く疎水のやうに通られて、やがて其處に、とろりとした碧潭を湛

へる。流れるとも見えぬ鏡のやうな水の底には、一尺ぐらゐの石斑魚が、無數に泳いで居る。折から秋口のこととして、水色はいやが上に澄み切つて、其の清麗なこと、言つたら、まるで玻璃を翳したやうだ。

兩岸の山峽には、松がある。杉がある。椎がある。椿がある。それが皆老木だ。中には早既に葉の黄ばみかけた、潤葉樹なども混つて居た。野生の菊も楚々として咲いて居た。こんな山の中の温泉宿に、こんな仙郷のあるとは、芭蕉も思はなかつた。菊慈童の菊の故事や、夢遊して舟を失つたといふ、桃源の話などまでが浮んで來た。

山中や菊は手折らぬ湯の句

曾良が胃腸を病んで、大層弱りかけた。芭蕉は心配して、土地の醫師を尋ねて診て貰つたりしたが、直ぐには癒りさうでなかつた。

「長途の旅にお供をしまして、折角是れまでまゐりましたのに、今更にお別れ申しますのは、いかにも心外でございますのみか、誠に相濟まぬことでございます。併し何分にも、病氣が直ぐ癒りさうにも思はれません。強ひてお供をいたせば、却つてお手足纏ひになりはしまいかと存じられます。いかゞでございます。私の親戚が伊勢の長島にあります。一足お先に立ちまして、其處へ落ちついて療養いたしたいと思ひますが、お許しが願はれませうか。」

「許すも許さぬも無いことだが、病氣のお前の、一人旅が案じられる。」

「病氣と申しまして、歩くに大切な脚を傷めた譯ではございせんから、飲食物に注意し、薬を用ひながら参りましたならば、ごうにか辿り着けることゝ存じます。たゞ心に懸りますのは、あとにお一人をお残し申すことでございます。」

「私も旅には可なり馴れて居る。その心配には及ばない。では先に行くがよい。」

「どうぞ御心に適つた旅を、お続けなされて下さいませ。私は是からとほ」とお

先に参りまして、若し野山の果てに倒れるやうなことがありまして、せめては、萩の花の美しく咲く中を選びます。」

「此の春に江戸を立つ時、『同行二人』と書いた、お前と私との此の檜木笠の文字が幾百里の長い旅路を風雨に晒されながらも、未だ斯のやうに薄いながらに跡を止めて居るが、此處で別れて、おのゝ一人になれば、二人といふ此の文字も、消さなくてはなるまいかな。」

芭蕉も寂しく笑つた。

大聖寺に出て来て、城外にある全昌寺といふのに芭蕉が泊つた。此の邊は未だ加賀の領内であつた。前々日に山中で袂を分つた曾良も、矢張り此の寺に一泊して、『夜もすがら秋風さくや裏の山』といふ句を残して、昨日の朝早く立つて行つたこ

とが知れた。曾良は前の日に此處を立つたのだ。自分は今日此處へ着いたのだ——と思ふと、僅か一夜の隔りか、千里の隔りのやうにも考へられて、健康を害ねて止む無く先に立つた、忠實な病曾良の、今夜の宿りの有様などまでを胸に浮べながら衆寮へ行つて寢床の中に入った。

此の夜も秋の風が吹いて、曾良の聽いたと同じやうに、裏山の草木が折々騒いだ。寒げに鳴く地蟲の細々とした聲が、夜陰の空氣に韻いて、室内にまで幽かに通つた。翌朝は、可なり早く目を覺したつもりであつたが、本堂には最う讀經の聲が聞えて居た。起き出して庫裡の外にある井戸側に行つて、口を漱ぎ顔を洗つた。汲み上げる水は、水晶のやうに綺麗で、用が無いまでも、汲んではサラリとこぼし、汲んではサラリとこぼして見たいやうな氣がした。地面も、庭石や、樹木も、一樣に露氣を含んで、秋の早朝の新鮮な氣流が、四邊一ぱいに満ちて居た。

打鳴された鐘板を合圖に、一寺の人々は皆食堂に入つた。老僧も小僧も、等しく

板の間に直かに端坐して、食膳に向つた。そして箸を取る前に先づ、簡単な唱名をするのであつた。それが終ると、衣の兩袖をかなぐり上げて、後の背のところで結んだ、裾短かに脛を現はした、素足の青年僧が、芭蕉の前へぎごちなく坐つて、給仕をして呉れるのであつた。

飯は恐ろしく黒く、ぼさ／＼として少しも糊氣がない。汁椀の中は箸で掻きまはして見ても、身らしいものは何も入つて居なかつた。其の他には、澤庵と味噌漬との間を行つたやうな、一種奇妙な漬物が、食ひたい者は随意に食ふがよいと言はぬばかりに、小鉢に盛られてあるだけであつた。老僧も小僧も、何の不思議も無さうに、それを美味さうにムシャ／＼と食べた。簡素の衣食住に馴れて居る芭蕉には斯うした食事が寧ろ有難く思はれた。

今日は越前の國に足を踏み入れるのだ——。芭蕉は斯う思ひながら、一寺の人々に挨拶をして、匆卒として堂を下つた。そして草鞋の紐を結んで居たところが、先

刻食事の時に、彼に給仕をして呉れた、頭かたま體の鉢の開いた青年僧が、紙や硯を持つてやつて来て、何か一筆書残して行つて貰ひたいと、頻りに頼むのであつた。折から庭先の柳の葉が、秋の朝風にハラ／＼と散つて居た。

庭掃いて出づるや寺に散る柳

七十八

加賀と越前との境にある、吉崎の入江を舟で行つて、『汐越の松』といふのを見た。景色に可なり特長のある處ではあつたが、西行の『夜もすがら嵐に波をいこばせて月をたれたる汐越の松』といふ歌に、大凡そ盡きて居るやうに思はれた。

丸岡の、天龍寺の長老といふのは、古くから芭蕉に縁故のある人であつた。此の機に會はなければ、何時また會へることか分らないと思つたので、態々訪ねて行つた。先方では、目の前に立ち現はれた芭蕉の面影を見て、實際のことゝは思へぬといふやうな表情をしながら、涙を浮べて其の會ひ得たことを喜んだ。

芭蕉を見送つて金澤を立ち出た北枝は、まだ彼に隨行して居たのであつた。敬慕して止まぬ師匠と別れるのが厭さに、それにまた、途中で供の曾良に先に行かれてしまつて、一人旅になつて北國に漂泊する師匠の佗しさを思ひ遣つたりして、道々の風景を共に賞しながら、來るとも無しに、とう／＼此地まで來てしまつたのであつた。さして今更のやうに、思はず遠くまで供をして來たことに氣がついた。

「何處までお供をいたしましても、お名残は遂に盡きません。思ひ切つてこれでお別れ申すことにいたします。」

「送つて下さるのをよいことにして、とんだ遠くへまでお誘ひしました。定めし御

迷惑であつたでせう。お蔭で楽しい旅を續けました。」

「これから先は、たゞお一人の旅。季節もおひく秋深くなつてまゐりますれば、道中は吳々もお身をお厭ひなさりませ。」

「有難う。またお會ひ申しませう。金澤へお歸りになつたならば、生駒氏、句空氏其他皆の衆に、宜しく言つたとお傳へ下さい。」

先の日に曾良と別れ、今また北枝と別れて、芭蕉は一人旅になつた。福井の城下を去ること四里の山奥に、曹洞宗の大本山永平寺があつた。彼は其處に脚を向けた。田や畑の間を縫うた一路は、行つてもくなくに長かつた。松よりも杉の多い山裾にさしかゝつた頃、水の清らかな一筋の川に出逢うた。是より道は何處まで行つても川と離れなかつた。山はおひく深くなる様子だ。都を遠く避けた、深山の此の寂莫な淨地に、己の宗風を護る可き、法城の地を卜さうとした宗祖道元禪師が始めて此地に脚を踏み入れて、澄んだ水の流れる川を見つけ出し、何處までもくそ

れを頼りに溯つて行つた當時の、其の心持や様子が、ありくくと察しられた。

石垣を築いた砦のやうな場所に來た。もう既に永平寺の境内なのだ。山門までは其處から更に十數丁あつた。川も一緒に境内に入つて行つた。川の盡きる處、玲瓏とした水が崖に懸つて、瀧をなして居た。

山門、中雀門、佛殿、法堂を直系にして、其の前後左右に、宏大な堂塔伽藍が、山に倚り谷に臨んで幾十となく構へられ、四通八達の屋根ある歩廊によつて、隨所に行き得る建築の様式である。

深く山に圍まれた密林の奥の幽境に、固く礎を据えられた、此の護法の一大城廓は、見るから實に莊嚴を極めて居た。其の夜は傘松閣さんしょうかくに泊めて貰つた。夜が更けて一山が静けさの裡に沈んで行くにつれて、山際を洗ふ屋後の谿流が、淙々の聲を高めた。

夜明けには、まだ大分間のある頃、芭蕉はフト目を覺した。咳一つしても、恐ろ

しく大きく響くほど、四邊は森閑として居る。何時また斯うした静寂な境内に、一夜を明す機会があるか知れないと思つた芭蕉は、まだ眠の底にある、靈域の味爽の景色を見て置きたくなつて、靜かに寢床を起き出した。

ひた／＼と囁くやうな、嘗めるやうな音が幽かに聞える。それは藁草履を穿いた雲水の人々が、石疊みの歩廊を行く足音であつた。まだ夜深く、一山の僧達は眠つて居るであらうと思つたのに、早くも起き出して、お勤前の曉天坐禪をすべく、僧堂へと集まり行くのであつたことが知れた。剃り立ての青い頭をした雲水が、微かな燈影に照されながら、此方の歩廊、彼方の歩廊を、黙々として靜かに行く。

山の形も樹の色もまだ暗くて見えない。空の遠くに星屑が、神秘的な光で瞬いて居る。太鼓が鳴つた。鉦を打ち並べた太鼓の椽を、撥でガラ／＼と掻きまはすやうな音がする多數の僧侶達が、結伽趺坐して禪定に入らうとするのだ。

宗祖道元が、天竺に渡る時に背負うて行つたのだといふ、古びた白木造りの笈を

見せて貰つた。非常に大きな重さうな物だ。人煙は稀薄、交通は至難の往昔にありながら、佛法の眞諦を異域の空に欣求して、茫漠とした千里の雲山を往つて復つた、名僧の鞏固な意志力に對して、敬意を拂はずには居られなかつた。

七十九

福井に、等裁といふ老隱士が住んで居る筈であつた。最う十年ほどの以前に江戸に出て来て、芭蕉を深川の草庵に訪れたことがある。其の後も時々文通などをして居たのであつたが、いつとはなしに、音信も絶えて、杳とした儘になつて居たのであつた。

「あの時分ですら、大分の老齡であつたから、今ではどんなにか、老い果てたことだらう。それとも或は既に故人になつて居るかも知れない——。」

芭蕉は斯う思ひながら、覺束ない謎でも解くやうな心持で、心當りを探し廻つて四邊の人々に尋ねて見た。まだ存命であることが知れた。居所も分つた。

市内を離れて、一路村落の方に續かうとする處に、三々五々家が建つてあつた。軒の傾いた、黒ずんだ萱葺の小さな家に、枯れかけた夕顔や糸瓜の蔓が這ひかゝつて、鶏頭や箒の木に、^二がなかば隠れて居た。それが老いた等栽の佗住居であつた。芭蕉は古い日記の綴でも見つけ出したやうな氣がした。

「御免なさい。」

門口に立つて聲をかけた。皺枯れた聲の返事があつて、血色のよく無い瘦せかけた老婆が出て來た。

「等栽様のお住ひはこちらですか。」

「はい——どちらからお出での御坊でござりますか。主人は、あすこに見える懇意の人の宅に行つて居ります。御用がおありでしたら、あの方へお尋ね下さい。」

懇意の家といふ方を指しながら、物憂さうに言ふのであつた。等栽の妻らしい。訪ねる自分、訪ねられる彼、いづれにしても、昔の物語にでもありさうな、古めかしい風情だ。——など、芭蕉は思ひながら、等栽に會ひに行つた。知人の家で碁を圍んで居た等栽は、芭蕉に訪ねられて、目のあたり芭蕉が其處に在るのに、直ぐにはそれと判別がつかないらしく、籠甲縁の眼鏡の紐を、耳からはづしながら、しよぼ／＼した目で暫く眺めて居たが、漸く思ひ出して芭蕉と知るや否や、萎びた顔面に忽ち喜色を浮べた。そして、斯うしては居られないといふ風に、勝ち目であつたか負け目であつたか知れないが、相手に斷りも無しに、盤上に並べてあつた碁石を、ザク／＼と崩してしまつた。

等栽の家の暮しは貧しげであつた。併し居心地がよいので二日泊めて貰つた。禿

げた食膳に上るものは、少量の濁酒と、野生の青物ぐらゐであつたが、若い來つたと共に、さらりと俗から抜けた彼の生活は、生活其者が既に俳諧三昧であつた。妻なる老婆も、極めて無愛想ではあるが、まことに善良な人柄であつた。

「年をとりますと、殊更人懐かしくなるものでござります。まして思ひがけぬ貴方様が、お心にかけられて、斯様な處もお厭ひなく、態々お尋ね下されました御厚志が、あだやあろかに思はれませうか。御覽の通り毫碌してしまひまして、今ではたゞ此の老婆と、互に縋り合ふやうにして、其日々々をかぼそく過して居ります。」

「御達者で何より結構でございます。私とても大分年を取りました。併し幾ら年を取りましても、人の一生はなか／＼味ひ盡せぬやうに思はれます。斯うしてお目にかゝつて、お話をして居る間が、生命いのちの全部すべてのやうにも考へられます。」

名月を敦賀の灣頭に眺めようとする芭蕉が、暇を告げて出立しようとしたところが、等裁は名残惜しさうにして、芭蕉の姿を見て居た。いよ／＼を跨いで別れも

間際になつた。等裁の心は遂に動いた。

「私も御一緒に、敦賀の月にまゐりませう。」

よぼ／＼しながらも、身仕度をして、裾を甲斐々々しくたくし上げた。

芭蕉は、老衰した舊友の旅を、多少不安に思はぬではなかつたが、相携へて共に名月を賞するといふやうな機會が、今世に再びあらうとも思へぬだけに、有難い風流な宿縁として、喜ばぬ譯にはいかなかつた。

北の海に明るい月を眺めようとして、二人は秋の中にさまよひ出た。道を行くま

しに、海に近くなつて、白根ヶ嶽は漸く隠れて、比那ヶ島が現はれた。あさむつの橋といふのを渡り、鶯の關といふのを過ぎ、湯尾峠を越えた。其處は燧ヶ城であつた。歸山の空に初雁の渡る聲を聞きながら、十四日の夕方に、敦賀港に着いた。灣内は眼下に遠く展けて、恰度明月の前夜であつたものだから、空は拭つたやうに晴れて、立石岬の先端の方までが見えるほど明るかつた。

「この様子では、明日の名月は定めし佳いことであらう。」
宿の主人に問ひかけたところが

「晴れたかと思ひますと、急にまた曇りましたり、日が出て居ますのに、一方の空から雨を飛ばしましたり、天氣の定まりませぬのが、此の地方のならばしでございませすから、明晩のことは、とても測られませぬ。」

といふことであつた。明けて十五日になつたところが、果して亭主の言つた通り、晝の中から、空はどんよりと曇を帯びて、時々雨がバラ／＼と降つたりして、夜に

なつても、天候は怪しく、月は空のどの邊か、在所すら分らなかつた。

名月や北國日和定めなき

「いつぞや信濃路で眺めた時には、殊の外の名月で、天地は晝のやうに明るかつたが——。」

芭蕉は雅語のやうに言つて、仲秋の無月を惜んだ。

「月は有つても無くとも構ひません。涼しく寒い秋の今夜を、貴方様と斯うして、静かに客舎に居りますことが、老い果てた私にとりましては、何物にも代へられない深い樂しみで、又とない晩年の有難い思ひ出でござります——。」

と、等哉はとりなし顔に言つた。

越えて十六日の朝になつた。夜來の雨模様はカラリと晴れて、青く拭はれかけた大空に、風に吹き千断られた雲が、脚早にさつさと流れて行く。

ますほの浦に出かけて、小貝でも拾つて遊ばうといふことになつたところが、土

地の有志の天屋といふ人が、芭蕉等のために、酒壺や重詰の用意などをして、下男共に舟の世話をすることを命じて呉れた。

可なりに風があつたために、帆を上げた舟は迂るやうに早く、七里の海上を行くのに、さまで時間がかゝらなかつた。其の浦曲は、背の高い蘆荻のサヤ／＼と風に鳴つて居る、ひっそりとした、見すばらしい漁村に過ぎなかつた。古びた法華寺の一室を暫時借り受けて、あつさり酒などを酌み交はしながら、日没頃まで四邊の風景に眺め入つた。暮れ行く秋の濱邊の風色は、静かといふよりも、寧ろ寒く寂しかつた。

芭蕉を出迎へのために、路通が美濃から遙々やつて來た。それは思ひがけぬことであつた。芭蕉は他愛も無く喜んだ。同時に一方には淡い離愁があつた。他でも無い。此地で等裁と別れねばならぬためであつた。

「御一緒に旅して戴いて、此上も無い楽しい思をしました。随分お身を大切になさ

れて、いつまでもお達者でおいで程を祈ります。」

芭蕉は等裁の顔を、しげ／＼と見ながら言つた。

「何時まで生き永らへましたところで、此の老齡では先が見えて居ります。今此處でお別れしますのが、永のお別れになること、思ひます。何は兎もあれ、お蔭様で明日をも知れぬ老體に、楽しい思ひ出の種が授りました。此の楽しい思ひ出の種を何時までも心の中に温めて居りませう。」

等裁は微笑を浮かべながらも、どこかに暗然とした表情があつた。芭蕉は、秋風に吹かれる落葉の音を聴くやうな心持がした。

よぼ／＼した等裁は、孤影寂しく福井の方へ踵を返した。別れ去つた老友の傍を目に浮かべながら、芭蕉は路通と共に、日本海に離れて美濃路の方に入つた。

途中、時に馬に乗つたりしながら、路通を共に連れて、芭蕉が大垣まで行つたところが、曩に奥州路から北國地方にかけて、風雨の旅を共にし、まめ／＼しく芭蕉のために盡して呉れて居たのを、途中で圖らずも病氣になつて、止む無く先に歸つた曾良が、静養して居た伊勢から態々やつて来て、恢復した健康さうな身體を見せて呉れた。越人も馬で出迎へて呉れた。

一同は一ト先づ如行の家に落ちついた。それと聞いた多くの知人や門下が、晝となく夜となく訪ねて来て、まるで蘇生した人にも再會するやうなことを言つて、無事であつたことを喜び、長途の旅勞を稿つて呉れた。

花も散りがてな、陽氣な春先に江戸を立つて、千住を北に奥州へと旅立つたので

あつたのが、今斯うして、冷かな秋風の坐るに身に沁む頃、漸く此の大垣にまで辿り着いたのだ。顧みると、決して短かい日數ではなかつた。殊に行く先々、囁目する風物に日々變化のあつたゞけに、今更永い感じがして、二年も三年も旅の空に悶して來たやうな、遠々しい心持さへするのであつた。

身體は元來虚弱でも、自己の意識を超えて、宇宙の精神に直入する、健氣な或る知れざる力に支へられて、時には寒暑嶮路に叩まされるやうなことがあつても直ぐにそれを撥ね返して、病脚を愛撫しながら、旅を行き旅を楽しみつゝ、奥羽から北陸にかけて、長途六百里の大旅行を續けて、自然の恩寵の下に、自然を禮讚しながら、つゝが無く此地まで來ることの出來た、旅の詩人たる自己の幸福を思ふと、芭蕉の胸には歡喜が溢れた。

如行の家に、竹戸といふ俳諧好きの下男が居た。それが旅に瘦せ時に瘦せて、此家に辿り着いた芭蕉を、非常に敬ひ勞つて、肩を叩いて呉れたり、脚を揉んで呉れ

たり、いろ／＼と深切の限りを盡すので、芭蕉は其の禮心まで、永の間を身に着けて来た紙衾かみこを彼に與へた。此品こは奥州路も大分奥まで入つて、最上の庄に行つた時に、土地の知人から贈られたもので、晝は疊んで携へられ、夜は草枕の床に藉かれ、山海幾百里の長い道中を、彼に供した記念の品で、擦り切れたり破れたりした箇所も少くなかつた。併しそれが敬慕する芭蕉の、床しい旅を物語る品であるだけに、他の門人達は、竹戸を頻りに羨しがつた。

暫く大垣に滞在して、旅の疲勞を休めた芭蕉は、名古屋から伊勢の山田に出た。そして更に奈良の方に出た。途中山路にさしかゝつてフト見ると、葉の枯れかけた木立の枝に、一疋の猿がしよんぼりと跼つて、折から降る時雨に、寒さうに濡れながら、身をすくめて、人が通つても、逃げようともしないで、小籠でも欲しさうにして居た。

奈良から京都に出た。去來の勧めによつて、其の所有の嵯峨の落柿舎に、一ト先

づ落ちつくことにした。此の別莊を落柿舎と名づけたについて、去來は面白いことを芭蕉に語つて聞かせた。

「此の家を私が別莊にしましてから、最う五六年になります。御覽の通り、周圍には澤山に柿の木がありますが、常に置きます番人は、たゞの一度も本宅の方へ、別莊になつた柿だと言つて届けて呉れましたことも無ければ、柿を賣つた代價だと言つて、金を持つて来たこともなかつたのでございます。黙つて居ればいゝことにして、あまりに人を馬鹿にした仕打だと思ひまして、時には叱りつけたこともありました。

ところが今年の秋の初めの頃、私は暫く此の別莊に来て居りました。すると或る日のこと、市中の商人が参りまして、豊かに實のなつた柿の木を見上げながら、立木の儘買つて置いて、よく色づいた頃もぎに来ると申しまして、金を一貫文差出して、喜んで歸つたのでございました。

私は其後も引續いて、此の別荘に滞在して居りました。ところが風の吹く或る晩のことです。何か屋根にぶつかつて、ころ／＼と走り轉げる音。庭に落ちてびしやりと潰れる音が頻りにしまして、終夜止まないのです。柿が落ちるのだなと思ひまして、翌朝起きて見ましたところが、案の状、落ちてひしげた柿が、庭一面に轉がつて、足の踏みどころも無い有様でございました。

柿の買手の商人は、風が氣になつたらしく、早速やつてまゐりました。そして庭一面に落ちて居る柿の實を眺め、また疎らになつた柿の木の梢を見上げなどしながら、私は向髪の幼ない時分から、白髪の今日になるまで、柿商賣を渡世にして來たが、こんなならしも無く落ちる柿は、まだ見たことがない。申し兼ねるがいつぞやの代金は返して貰ひたいと、頻りに謝まるのでございます。無理もないことだと思ひまして、言ふまゝに金を返してやりました。それ以來此の別荘を落柿舎と名づけたのでございます。」

八十二

芭蕉は落柿舎で其の年を暮した。正月が來た。桂川を隔て、嵐山一帶の山脈を控えた嵯峨の早春はなかく／＼に寒かつた。日蔭の霜柱は冬の儘で白く光つて居る。折々は雪なども催した。丘の松林はよく風に鳴つた。人が訪ねても來ず。自分からも訪ねて行かず、芭蕉は殻に包まれてぶら下つてゐる簑蟲のやうに、背中を丸くして庵中に閉籠つて居た。

併し一陽來復の季節は争はれなかつた。知らぬ間に、日に／＼気温は加はつて、梅の花がチラホラと咲き、ふつくりと柔らいだ黒い土からは、若草が薄青く芽を出

し、毛ばだつた銀色のぼつちをつけた猫柳なども、春色に風情を添へた。鶯もよく鳴いた。

芭蕉が落柿舎を出て、琵琶湖畔の幻住庵に移つたのは、櫻が咲いて、散つて、生温いどんよりとした日が、幾日も續く暮春の頃であつた。幻住庵の在るところは、石山の奥、國分山の麓で、世間とはまるでかけ離れた別天地をなして居た。

永らく手入をしなかつたものと見えて、草庵はひしげたやうに破損して居たが、芭蕉には矢張りそれ乍らに、住んで快適なものを見出すことが出来た。世の中から、人々から、獨り出離して、吉野の山奥深く分け入つた時の、西行のやうな孤寂な心持になつて、最う此處からは、再び餘所へは出まいなど、さへ思つた。

春行く頃なものだから、葉櫻の蔭に一二輪の花が残つて居たり、薄紫の山藤が、松の枝に絡んで、蕾の花房を垂れたりして居た。時鳥もしばく啼いた。

湖畔に出て、瀬田の橋を渡つて、矢走の邊まで歩いて見たりした。比叡山も比良

山も柔らかに霞んで見える。いつもは峻峻な山勢を示して居る伊吹までが、春の暖かい呼吸に唆かされたやうに、山の曲線を幾分か和めて、溶蕩として眠つてゐる。大津、唐崎、坂本から、遠く右の方堅田邊の人煙は、眞晝日に夢でも見て居るやうな光景だ。鈍い光線の一面に漂ふ湖上には、春の名残の何物か、緩く搖曳して、人の心に甘い愁といふやうなものを裏づける。釣をして居る人が、其處此處に幾人も居た。温さうに見える穏かな波が、釣糸の浮標を呑んだり吐いたりして居る。

行く春を近江の人と惜みける

草庵の柱には、旅行の記念の笠をかけて置いた。芭蕉は折々其の笠を見ては、言ひ知れぬ旅の思ひ出の楽しみに耽つた。夜は庵近くによく水鶏が来て鳴いた。澄明な清水が、つい近くの岩の間から、むく／＼と盛り上つて湧いて居た。彼は朝起きると手づから其の清水を汲んで米をこいだ。朝夕の簡素な生活は、『一爐の備いと輕し』といふ文字其儘であつた。

たまく、堅田や大津や京都邊から、知人の訪ねて來ることもあつた。近所の堂守の爺が、心易げに時々やつて來るので、いつも溢茶を入れて振舞つた。村の子供達が來て

「猪や兎が出て、畑の物を食ひ荒すから、この弓で射殺してやるんだ。」

など言つて、割竹に麻糸を張つた玩具のやうな弓などを、勇ましげに振りまはして見せたりした。

春はすつかり行つてしまつた。どこを見ても、何を見ても、最う全く初夏の景物だ。夜もおひくに短かくなつて、夜更しをして碌々眠らないうちに、曉の薄明が戸の隙間から白々と這ひ込むやうなことも、しばくあつた。

八十三

佗しく小さな幻住庵ではあるが、芭蕉にはそれが、身體に雨露を凌ぐ場所であるのみか、靜かに精神の枕を横たへる、氣に入つた隠家であつた。心身に適つた環境は、自然の裡に投影する、自己の詩生活の全部を、宛ら淨玻璃にかけた物象のやうに、明らかに省察させて呉れた。胖かな彼の心は彼をして、何といふことの無い或る有難さの裡に安住せしめた。

先づたのむ椎の木もあり頁木立

併し斯うして、山野の裡に我が姿の跡を絶つて、ひたすら閑寂に涵つて、また他に餘念無いやうなもの、醜味の糟粕を賞めたやうな、枯木寒巖では彼は居られなかつた。切れば血の出る人間であつた。従つて『時の流』といふものに、つらく驚くこともあつた。過去の思ひ出に、我知らず沈むことも無いではなかつた。

——悲しく破れた若い心を抱いて、故郷の夜を家出した頃のことや、フツした行きがかりから、お雪と思ひも寄らぬ戀に落ちて、秘やかな悲悅を胸に交はし合つた

頃の、青年の我を思ひ出すこともあつた。

廣い江戸の眞中に出て来て、俳壇に向つて素晴らしい氣を負ふと共に、機會があつたならば幕府に仕官して、大いに出世しようと思氣組んだ當時のことや、言語に道の斷えた語得の法悦を味はうとして、佛頂和尚の棒下に參禪したことなどまでが、それからそれへと胸に浮んで來る時であつた。

けれどもそれ等のことは、いはゆる彼も一時、是も一時、つまり自分の本來を見つげ出すまでの道程で、遂にはいつの間にか、矢張り天賦の儘に、非世間的な無爲に安んじて、唯『詩』の一筋に、自己の全生命を繋いで來たのであつたことを、今にして沁々と彼は思つた。

乙州や其の他の門人が、時々來ては、薪を割つたり、水を汲んで呉れたりした。夜更けまで雑談をするやうなこともあつた。

『俳道に身を置くものは、得失を思はず、また人言に忤まず、天地を友として而も

人倫を忘れずに、自然の姿に深く心を潜めることを忘れてはならない。見たところ森羅萬象は複雑だが、而も其の裏面には、一糸亂れぬ統一がある』など、感想を洩すこともあつた。

夏の盛りの頃。京都へ出かけて行つて、凡鳥の家に泊つた。そして誘ひ出されて四條河原に納涼をして、川波に映る赤い灯影を眺めたりした。

八十四

天地の間に、秋の氣配がまた何處からとも無く音づれて來た。はつきりと意識は出來ないが、季は確かに夏から去つた。毎年思ひ出を残して來た十五夜が、またそ

ろく／＼近づいた。

名月の當夜は、舟を湖上に浮べようといふ相談が、最寄の人々との間に持ち上つた。彼は前日粟津の木曾寺に出かけて行つて旅寝した。人々はおひ／＼集つた。乙州は酒を持つて來た。正秀は香の高い茶と菓子とを包んで來た。支考は煮魚にぎかなを重詰めにして來た。其の他の人々も、思ひ／＼の物を携へて來た。

清宴が開かれた。下戸の洒堂は頻りに茶を喜んだ。一同の中でも殊に酒のいける丈草は、盃を手にしながら、漢詩などを静かに口吟んだ。支考は若々しく立廻つて一座を幹旋した。年の多い木節は、老實其者のやうにして、言葉少なに而も楽しんでゐた。飄々として風のやうなのは、依然として惟然だ。自分は何も持つても來ずに、酒をさされ、ば酒に驚き、茶を汲まれ、ば茶に感ずるといふ風であつた。芭蕉は此間に處して、十人十色の面白さに、柔らいだ顔で眺めて居た。

やがて舟を浮べた。水棹から滴る車の音も聞えさうな、ひつそりとして淡く煙る

湖上には、月が晝のやうに明るい。鏡山は其の明るい空間に近く聳えて居る。比叡山は横川の松の森の方に連なり、比良の高嶺の邊は、一列の雁でも渡りさうな風景だ。『明月天山を出づ。蒼茫雪海の間——』李白の詩片が、芭蕉の想念に落ちて來た。松本に舟を漕ぎ寄せて、茶亭の欄干に凭つた。木曾寺で先づ時を過し、それからまた舟で時を費した揚句のことなものであるから、夜はめつきり更け渡つて、運行して居るとも見えなかつた大空の月が、最う大分西の方に傾いた。湖も波を収めて眠に落ちた。水邊に近いだけに、冷氣が非常に加はつて、人々に身體をブル／＼させた。

「どうせ斯う夜を更したのですから、明方まで語り續けませう。」
血氣の支考が言ふと、乙州が同意した。

「それも面白からう。」

すると、丈草が傍から言葉を挟んだ。

「これから千那を訪ねては何うか。」

聞いて惟然はフ、と笑つた。

「寢に温まつて居るとふろを、不意に起される、千那の顔が見えるやうだ。」

芭蕉は皆の言ふなりに任せて居た。一同は千那を尋ねて、其の住み居る尾花川の曉色を眺めることにした。夜は更け切つて、月は長等山の木立の間に落ち、湖上は既に曉に近い微明に仄はかされた。

明月に一夜を明した彼等は、尙足らずに、翌日も芭蕉を擁して、堅田の浦に舟を浮べた。十六夜の明月は、前夜に劣らないほどの清らかな光を、水の淡い湖面に放つた。昨夜月見を共にした正秀が抜けて居るので、彼を訪ねようといふことになつた。正秀の家は湖岸に臨んだ處にあつた。舟を家の前へ漕ぎつけて、支考が、水吹く風に大きな聲を投げて呼んだ。聞きつけた正秀は、喜んで駆け出して来て、水岸に手を延して、舟縁から一人々々を陸に上げて呉れた。

離座敷は静かであつた。菜園には廣葉に露の玉をころがす里芋もあつた。莢の柔

かい青さ、げもあつた。いけすの中には銀鱗の鮮かな鯉や鮒も飼つてあつた。正秀は家人に命じて、これらの物を料理させた。

時の移るにつれて、酒盃の数も大分重なつた。丈草などは可なり酔つて来た。促し合つて歸らうとしても、正秀はなか／＼許さない。酔ふ人は益々酔つて来る。主人の正秀までが、いつの間にか玉山崩れようとして居る。

「近くまた會ふことにしませう。」

芭蕉が仲に入つた。一同は漸く座を立つた。すると正秀は、そこまで見送ると言つて、酒器をぶら下げて、皆のあとから、ひよろ／＼と尾いて来た。

舟の繋いである岸邊まで来て、また酒盛が初まつた。芭蕉は彼等の随々馬とした止度の無い酒の飲み振りを見て、困つた人達だと思つて苦笑を催したが、支考のやうな才子も居れば、惟然のやうな風に似た人物も居るのを、たゞ其の中に親和して、黙つて酩酊振を眺めながら、明るい月影を舞んで居た。

門下の人々は、芭蕉の名を呼ぶのに、しばしば『翁』の敬稱を用ひた。彼はそれを避けた。「人麿や赤人のやうな、千古に卓越した歌聖ですら、其の何れの歌集を見ても、單に其の名が記されてあるだけだ。それに私などが翁といふやうな稱呼を用ひられることは、世間に對して甚だ憚のあることである。以後は必ず無用にして下さい。」と言つた。

或日、攝津の伊丹に住んで居る鬼貫が、でく／＼と肥つた體軀をして芭蕉を訪ねて來た。此の人は、空道和尚に參禪などもして、なか／＼剛愎な性質の人物である。

俳諧に就ても、所謂伊丹派の領袖だけに、嘗ては芭蕉を睥睨して、『先頃俳諧を初めた芭蕉といふ者、大して秀れた詩藻の持主とも思へなかつたのに、何時の間にか一廉の俳人になり澄して、處々方々を押強く歩き廻るさうだ』などと冷かに嘲つたこともあるのだ。

また『俳道に入ることは、先づ初心を離れて上手に到り、そして更に、其の上手から離れ得て、初めて名人と謂ひ得るであらう。上手といふのは、句を面白く作ることである。達して名人になると、さまで面白い花やかさも無く、而も底深く句のあるの言ふのだ。なほ一層其の奥に入つては、色も無く香も無いものゝ如くなる妙境で、其處に至つて初めて、得たといふことが出来るであらう』など、高く見識を持って容易に人に下らない男なのだ。

其の鬼貫が、今、自分の方から芭蕉を訪ねて來たのだ。水晶の玉のやうに、圓く澄む芭蕉の人柄と、他人の追隨を許さぬ、其の獨創の秀れた詩眼とに、流石の鬼貫

も、何時の間にか傾倒せずには居られぬやうになつて來たのだ。

鬼貫は芭蕉に會つた。目のあたり會つて見て、鬼貫の心は益々動いた。當時の所謂『俳諧師』なる一種の型から全く離れた、淡く垢抜けのした非僧非俗の一居士であることが、初對面の刹那に先づ直覺された。

時候の話をすれば時候の話、世間話をすれば世間話。風流の話をすれば風流の話。鬼貫に會話する芭蕉には、些の街ふものも驕るものも無く、たゞありの儘に受けて働くだけで、更に心に住するものがなかつた。地上に置けば其儘地上に位置を保ち空間に懸ければ、其儘空間に位置を保つ玄妙な物體のやうな、芭蕉の風格の前には鬼貫の剛愎も見識も手答へがなかつた。

「常に考へては居るのですが、俳道の奥儀は何處にあることなのでせう。」

「私も考へて居りますのですが、つまり赤ん坊が、母親の言ふまゝに、右し左する心持で居ればよいのではありますまいか。」

「近頃の御作を伺はして下さいませんか。」

「先づたのむ椎の樹もあり夏木立——。これは、此の草屋へ越して來ました頃の句でございます。」

鬼貫は耳を傾けて聞いて居た。そして其の句を口の中で繰り返してゐた。

「最早申すべきことがありません。漸く無心所着といふことの密意を識りました。」

鬼貫は、芭蕉の生活の奥に光る或物を感じた。そして『微風幽松を吹く、近く聽けば聲愈好し』といふ、寒山の詩を、相見ての後の芭蕉の上に思ひ合はされた。

其後もたび／＼鬼貫は訪ねて來て、いろ／＼と感想などを述べた。撞かねば鳴らず、撞けば鳴る鐘のやうに、其の都度芭蕉は、誘はれるまゝに言説をせぬではなかつたが、而もいつも『吾曾不説』の心持は忘れなかつた。鬼貫は、時には我が伊丹派の仲間までを引連れて、無頓着に幻住庵に出入した。門下の人達はそれを氣にした。

「他派の人々との、お心易い御交遊は、世の憚とも存じられますれば、目立たぬ程になされましてはいかゞでございませう。」

併し芭蕉は氣にしなかつた。

「志をつとめ、情を慰めて、あながちに他の是非を云はず、たゞ眞實の一路に遊ぶならば、誰と交はらうとも、一向に差支へないことだ。」

水のやうな淡い心持で、彼は斯ういふ風に、すべてに打解けて接した。

八十六

京都から、去來が訪ねて来て、幻住庵に一晩泊つた其の翌日、凡鳥、酒堂、木節、

丈草等がやつて来て落ち合つた。過ぐる秋の夜に、一緒に月見をした連中だ。

「珍しい集合だ。正秀も呼びませう。」

芭蕉が言ふと

「私が使に行つてまゐります。」

と、凡鳥は立つて、湖岸の正秀の家に出かけて行つた。

凡鳥は正秀を連れて戻つて来た。態々呼びに行かれたので、正秀は喜んで居る。

「あの月夜の晩には、いろ／＼御馳走でした。」

「お構ひもいたしませんで。」

芭蕉の挨拶に、正秀が返事をして居ると、他の人々も思ひ／＼のことを言つた。

「寒山が来た道を忘れたのを、拾得が手を携へて歸つたといふ話がありますが、あの晩の光景は、それに似て居ました。」

「酔つてしまつて、しまひにはお月様も何もありませんでした。」

「惟然の様子が殊に面白かつた。——惟然は今頃何處に居ることやら。」
 「風の行方を思ふやうなものだ。」

一同は狭い草庵の内に膝つき合せて、光線の薄く映る障子の外に、蕭々とした秋風の音を聴きながら、いつもの俳談に耽つた。芭蕉は問はれるまゝに語つた。併し其の言ふところは、相手によつて一様ではなかつた。

「一句は僅かに十七文字なのだから、一字もおろそかには出来ない。それにまた、一生の中に、秀逸が三句か五句もあらば、立派な作者だ。若し十句以上もあらば、それは名人と謂つていい。」

これは凡鳥に。

「發句は、あれこれと取り集めた寄木細工のやうでなしに、とろりと黄金を伸べたやうでなくてはならぬ。」

これは洒堂に。

「一句を作る毎に、さう／＼念を入れるには及びますまい。併し俳意の確かでなければならぬことは、言ふまでもありません。」

これは去來に。

「すべての物象を見るに、萬代不易のものがあります。一時の變化するものがあります。二つのやうに見えて、而も其の底に流れて居るものは一つです。」

これは丈草に。

「中古の歌人では、誰でございませう。」
 と木節が尋ねた。

「先づ西行、實朝あたりと思ひます。」
 と答へた。

日暮に近い頃、一同は連れ立つて芭蕉の許を辭した。山坂を下る歸りの道すがら正秀は丈草に言つた。

「師の説かれるところが、まち／＼のやうに思へて、私にはよく意味が捉めません。」
 「さう六ヶしく考へなくともよいでせう。野狐禪らしいことを申すやうですが、青い山は只青い山。白い雲はたゞ白い雲。師は恰度達磨のやうなお方です。」

「なるほど味ひますと、雪と言はれた一方に、炭と申されても、矢張り其の間に、行き渡つたものがあるのでございませうな」

「支那の朱晦庵は、動かざること磨の如し、とか申して居るやうです。それと同じで、師の言葉は、動きもし廻るやうにも見えませうが、心棒はいつも眞ん中に据つて居るやうに存じます。」

八十七

村の子供等が、熟した柿を食つて、頬をべと／＼にしたり、冷たい日射しに、赤蜻蛉が銀色の羽を閃かしたりする頃となつて、秋は深くなつた。夜などは屋根に薄く霜さへ降りた。

幻住庵の侘び住ひに飽いたのではないが、場所が石山の奥なものだから、冷気が非常に強くて、虚弱な芭蕉には、とても來る冬を、此處で過せさうにも思はれなかつた。彼の健康状態を知つて居る門人達が、先づそれを氣遣つた。そこで初冬に近い頃粟津の義仲寺内にある無名庵に移つた。

無名庵の一冬を、彼は殆んど沈黙がちに暮した。それは單に口の沈黙ではなくて心の沈黙であつた。さうしてたゞ、活きた自己の精神と、活きた自然の核心との接觸を續けた。

漸く年が明けた。

春ながら未だ早い。梅の蕾も固く、湖の水風は寒く、時々綿のやうな雪が、フ

ワリ／＼と落ちたりした。或日大津の本間主馬が、態々使を以て彼を招ぎに来た。折から催した比叡風の寒いなかを、彼は湖畔に添うて、使と一緒に出向いて行つた。主人は馳走を調へて待つて居た。

座敷の壁際に顔面が掛けてあつた。それは目や口の跡が大きな洞になつて居る骸骨の一群が、笛を吹き、太鼓を叩き、其の調子に合せて、能を舞つて居る繪であつた。

芭蕉が目を注いで居るのを見て、主人は言つた。

「人から貰ひましたので、額に仕立て、見ましたのです。」

「面白い圖柄です。人の生前の戯れは、皆此の通りのものでせう。鬨體を枕にして

夢幻を分たぬものが、世の中かも知れません。」

「悟りがましく掛けて置きまして、お耻かしようございます。」

「面白いだけでよからうと思ひます。悟るも悟らぬもありますまい。」

そんなことから、話の緒口が開けて、人の世のこと、俳諧のこと、それからそれへと漫ろに語り續けて、物靜かに夜を更かした。

「今夜は是非お泊りを願ひます。」

「御厄介になりませう。」

「お蔭で緩くりとした氣持で、お話が伺はれます。」

「二人さりの此のお部屋、行燈だけで充分です。蠟燭は消さうではありませんか。灯の穂は瞬き、蠟は耗つて、時の移るのが目に見えるやうで、心忙しく思はれますから。」

流れる水のやうに、一處に滯らずに心に随つて移り變り、其の移り變ることによつて生ずる新鮮さの裡に、絶えず五官を洗ひつゝある芭蕉は、住みよい草舎と思つても、いつまでも執着はしなかつた。櫻や桃の花が散り盡して、野山が浅い新緑に彩られる頃、無名庵を去つて、嵯峨に出かけて行つて、嘗て起居した落柿舎にまた入つた。

鬱陶しく雨の降る頃が間も無く來た。人もあまり訪ねて來なかつた。例の實の落ちる柿の花が、小さく咲いて居る。徒然の折には、感想を書き誌して見たりした。

——喪に居るものは悲を主とし、酒を飲むものは閑を主とし、愁に住するものは愁を主とし、徒然を主とするものは徒然を主とし、哀に住するものは哀を主とする。

其處に神慮があり、佛意がある——など。

家具としては、机と、硯と、夜寝る蒲團と、僅かな食器ぐらゐるのもので、これも去來が持つて來て呉れたのだ。狭いにも拘はらず、室内はガランとして、簡單を通

り越して居た。場所は桂川を隔て、嵐山に對し、背後には松の丘が連つて居た。松の盡きるところ竹の村で、そこからは小倉山の頂部も見えた。月の明るい夜に、高倉帝の思召を奉じた仲國に尋ねられ、籬の中に清く怨んだ、小督局が侘住ひの跡と傳へられる處も、つい近くであつた。

芭蕉は、獨り住み、獨り思ふほど、心の澄むことはないと思へて居る。けれども氣の置けない知人が偶然に訪ねて來たり、遠方から音信などがあると、嬉しく思はずには居られぬ人懐かしさがあつた。或日去來の許から、菓子だの惣菜などを贈り届けて呉れた。そして其のあとから、去來自身が訪ねて來た。そこへまた圖らずも羽紅夫婦が音づれた。其の夜は一同が泊ることになつて、互に人懐かしい思を交はしながら、一つ蚊張に入つて寝た。

寝てからも、人々は物珍らしい一夜なものだから、取止めもないことを語り合つて、いつまでも話を續けた。そのうちについ寝そびれてしまつて、誰も彼も眠れな

い様子だ。最う夜半なのだが、芭蕉は所在なさに、のこ／＼と寢床から起き出して湯沸ゆわかい冷えた湯を飲んだり、菓子盆などを取出した。蚊張越しにそれを眺めて居たものと見えて、他の人々ものこ／＼と這ひ出して来た。

「去年の夏には、凡鳥の家で、二疊吊の小さな蚊張に、四ヶ國の人が寢て、思ふことも四つ、夢もまた四つと書いたことであつたが、今夜もそれに似て居る。」

芭蕉の話に、皆々喜び興じて居るうちに、曉近くなつてしまつた。

其の朝がまた事であつた。日頃の簡素な生活は、不時の來客の人々に充てるだけの食器にすら缺けて居た。一人が朝飯を濟すのを待つて、其の茶碗を濯いで、また他の一人が食事をするといふ有様であつた。

真面目な去來は此の或様を笑ひもせずと言つた。

「千利休せんりきゅうは、茶の湯に最も大切なものを求めて呉れと、弟から金數を托された時に晒木綿を一反買つて與へたと申すことですが、師のお心持もそれ宛らに存じられま

—す。」

八十九

卯の花が月の光に白く盛り上つて、時々杜鵑の空に啼く、初夏の季節になつた。或る夜芭蕉は、若くして死んだ杜國の面影を夢に見て、夜深い部屋の内に、獨り靜かに目を覺した。氣がつくと、彼は眠つた儘に潜然と涙を流して、泣いてゐたのであつた。

彼は惱ましげに、床の上に起き直つて、蒲團の上に手を組んだ。——心氣の感應する時には夢をなすといふことだ。陰が盡きて火を夢み、陽が盡きて水を夢みる。